



旧金比羅大芝居（金丸座） 日本最古の芝居小屋である金丸座の歌舞伎公演が四国路に春を告げる。

讃 樹 會

平成31年2月1日発行

CONTENTS

- 02 年頭所感
- 04 同窓生教授就任挨拶
- 05 新任教授就任挨拶
- 07 ニュースの窓
- 16 理事会議事録
- 17 国外留学助成金受賞の言葉
- 18 平成30年度研究助成金／研究奨励金 受賞の言葉
- 20 【近況報告】カンボジア勤務3年目。
- 22 【新企画 趣味ぞんまい】Insect Life
- 24 国外留学助成金 留学レポート
- 27 追悼
- 28 創部ものがたり【バドミントン部】
- 30 関連病院紹介【香川労災病院】
- 34 教授の横顔
- 40 支部会・懇親会
- 54 学生支援(競争的資金)活動報告
- 60 第39回香川大学医学部祭を終えて
- 63 編集後記／事務局からのお知らせ
- 64 診療科だより

発行 香川大学医学部医学科同窓会讃樹會
〒761-0793 香川県木田郡三木町池戸1750-1
Tel/Fax 087-840-2291
E-mail dousou@med.kagawa-u.ac.jp
http://www.kms.ac.jp/~dousou/

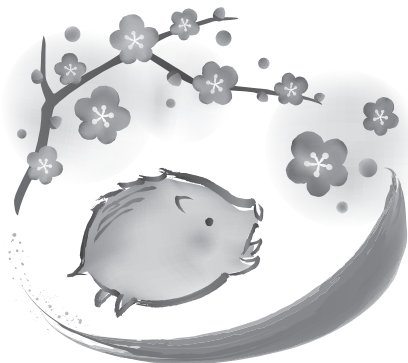
発行人 佐藤 清人
編集人 安田 真之
印刷所 株式会社



2019

年頭所感

人生100年時代と医師の働き方改革



讃樹會副会長

JCHOりつりん病院 院長

大森 浩二 (昭和61年卒・1期生)

皆さま、平成31年を恙なくお迎えのこととお慶び申し上げます。私は長らく母校に勤務していたこともあり、3本のメタセコイアのロゴマークの作成を始め、讃樹會には早くから親しく係らせていただいて参りました。2016年にJCHOりつりん病院に転勤してからも、副会長の一人として執行部の末席を汚しております。元号が変わる今年、年頭所感を執筆させていただけることを大変、光栄に思います。

人生100年時代

安倍首相を議長とする「人生100年時代構想会議」が回を重ね、超高齢社会を支える「人づくり改革」の進め方が議論されています。人づくりと言っても、大勢の高齢者を少人数で支える足腰の強い若い人を育てようというわけではありません。2035年に3,740万人に達する65歳以上の高齢者を、たった6,343万人の生産年齢(15~64歳)人口で支えるべしというのはもはや陳腐な議論です。生産年齢の上限が大幅に上げられつつあるのです。この会議の有識者の中心は、リンドン・グラットン教授、あのThe 100-year Life (ライフ・シフト 100年時代の人生戦略)の著者の一人です。人生100年時代、「ボーッと生きてんじゃねえよ!」ということ。就学-終身雇用-年金時代は既に終り、これからは、ICT、IoT、AIとうまく付き合いながら柔軟に転職・キャリアアップを図り、お金・家などの有形資産のみならず、人との絆や知識や健康など無形資産の形成に80歳まで励むべしとのこと。定年延長・年金支給の先送りと言ってしまうえば身も蓋もないですが・・・。

ところで、本当に100年も生きられるのでしょうか? 厚労省によれば2017年の日本人の平均寿命は過去最高、男は81.09歳、女は87.26歳。今後も年々伸び続け、WHOによると2007年生れの日本の小学5年生の50%は107歳まで生きるだろうというのですから驚きです。既に数十年生きてきた人では10歳毎に2~3年の割合で平均寿命の延長が鈍る。それでも、例えば讃樹會の設立の翌年、1987年に生まれて今年32歳になる人の半分は100歳まで、私と同じ1960年生まれの人々の半分は90~92歳まで生きるとのことです。昨年末には「健康寿命の延伸等を図るための脳卒中、心臓病その他の循環器病に係る対策に関する基本法」が成立しましたが、これも「がん対策基本法」と並んで健康寿命の延長に寄与することが期待されます。

医師の高齢化と働き方改革

一期生の私が後期高齢者となる2035年には、医師数は2016年より8万人増え約40万人になるそうです。医学部定員増で母校の先生方は苦勞されていますが、若い医師が増えるわけではありません。実際は、60歳以上

の医師が14.1万人（総数の36%）へと2016年より6.4万人増加します。国はこれで医師数が充足すると言っていますが、それは、現在も改善の兆しすらない医師の長時間労働を前提としています。

さて、「働き方改革を推進するための関係法律の整備に関する法律」の成立を受けて、法定時間外労働の上限規制が、今年4月から適用されます。原則月45時間・年360時間、臨時的な労使の合意によっては、年720時間以内等に制限されます。これを超えて働かせた場合、6ヶ月以内の懲役等の罰則つきです。医師については5年の猶予があり、目下、「医師の働き方改革に関する検討会」でその上限が検討されています。地域医療の確保を名目に、事務局から提示された上限は年960時間（すなわち、過労死ラインとされる月80時間）、暫定特例水準が適応される病院では年1,920時間とのことです。2016年の調査では、勤務医の40%以上が、月80時間を超える時間外労働を強いられ、また年1,920時間を超える医師がいる病院は全体の約3割。少なくともこれを解消しようということのようです。

医師数を増やさず、勤務時間を削減するには、医師の仕事を減らすしかありません。方法としてはタスクシェア/シフト。高齢医師にも当直をさせよといいますが、しかし、2006年のデータで、60歳の男性勤務医の平均時間外労働時間は月80時間を既に超えています。

もう一つは、特定行為看護師制度です。在宅医療や輸液・血糖管理など、いわゆる包括的指示である手順書に従って、医師が行ってきた業務を看護師に代行させようというものです。しかし、その教育に現場の医師が借り出され、労働時間が増えるという皮肉なことが起こっています。

大いに期待されるのはやはり技術革新、特にAIの進化です。レイ・カーツワイル博士（現Google社）は技術的特異点（technical singularity:AIが人類の知能を凌駕する臨界点）を2045年から2029年に前倒したそうです。既に、病理組織診断、糖尿病性網膜症の診断、脳卒中の画像診断・トリアージなどで成果が上がっています。味方に付ければこんなに頼もしいものはありません。AIの医療へのインパクトについては、日本医師会の第IX次学術推進会議報告書「人工知能（AI）と医療」（2018）に詳記されています。いず

れにしても、AIが「医師の働き方」を大きく変えるのは明らかです。

さらに、終末期における「望まない」医療を適切に回避することは医師の負担減に有効かもしれません。国民には、「人生会議」の勧奨など、人生の最終段階の医療・ケアについての意思表示（リビングウィル）、ACPを促し、一方、医療・介護施設には、看取りに関する指針を普及させるのです。超高齢社会と終末期医療については、日本医師会の生命倫理懇談会で論議が尽くされています。これまで、欧米諸国の「尊厳死法」、さらには「安楽死法」に触れる一方、医療費適正化の観点から終末期医療を論ずることは「医療倫理に悖る」とし、また、安楽死の議論より、終末期医療の質の向上を目指すのが倫理的であるとしているのは、注目すべきです。

おわりに

亥年の今年、統一地方選挙、参議院選挙、4月1日の新元号発表、5月1日の即位の日、その日の前後の空前の超大型連休、6月には大阪でG20、9月にはラグビーワールドカップ日本大会開幕、10月には消費税増税、10月12日には高松で日本超音波医学会第29回四国地方会（大森が会長）、世界同時なら12月にはスターウォーズエピソード9の公開、など大小さまざまな行事が目白押しです。2019年が、世界と日本と、母校と、讃樹會関係者の皆さまの幸せに向かって、物事が猪のように力強く真っすぐに進む一年となりますよう、また、新元号の時代における母校と讃樹會の益々の繁栄を祈念しつつ、年頭所感の筆を擱きます。

同窓生教授就任挨拶

「教授就任にあたって」

～新生児医療の原点に戻って～

東京女子医科大学母子総合医療センター 新生児医学科 教授

和田 雅樹 (平成4年卒・7期生)



讃樹會の皆様におかれましては、御健勝、御活躍のこととお慶び申し上げます。私は平成27年に本同窓会報において前職である新潟大学地域医療教育センターの特任教授就任のご挨拶をさせていただきました。この度、平成30年9月に東京女子医科大学母子総合医療センター新生児医学科の教授に着任したため、再度の寄稿となり恐縮ですが、改めてご挨拶させていただきたいと思っております。

前回のご挨拶では、香川医科大学での「ひばり」の経験が小児科医、新生児科医の原点となっていること、さらに、新生児から小児期への連続した医療の課題について書かせていただきました。今回は卒業後の私のキャリアを中心に、今後の展望についてお伝えさせていただきます。

私は平成4年に本学を卒業し、故郷である新潟県に戻って新潟大学医学部小児科学教室に入局しました。新潟大学とその関連病院で研修した後、平成9年に東京女子医科大学母子総合医療センターで新生児医療の研修を行わせていただきました。母子総合医療センターはわが国初の母子センターであり、産科と新生児科、さらにフォローアップの一連の診療を各チームが共同しながら行っていくという体制をとっていました。初代教授の仁志田博司先生のもと、超低出生体重児の管理においては世界有数の成績を取っていました。その後、平成14年より東京歯科大学市川総合病院、平成18年より東京女子医科大学八千代医療センターでNICUの新規開設に取り組みさせていただきました。両施設とも新生児集中治療の分野はゼロからのスタートでしたが、施設設計、行政機関との交渉、地域連携、医療スタッフ教育、さらに診療と、非常に多くの貴重な経験をさせていただきました。その後、平成21年に新潟大学医歯学総合病院に戻り、母子センター副センター長として総合周産期母子医療センター開設に取り組みさせていただきました。そして、平成26年に新潟大学地域医療教育センター魚沼基幹病院特任教授として新病院の開院、運営に関わらせていただきました。つまり、常に臨床現場に身を置きながら、新病院の開院を2施設、NICUの開設や移転を4施設で経験させていただきました。

研究としては主に臨床研究に取り組んできましたが、安定同位体呼吸テストによる乳児の消化吸収能・肝機能の評価によって新潟大学で医学博士号を取得しました。近年は新生児蘇生法(NCPR)がメインテーマであり、新生児蘇生に関する臨床研究や教育システム開発、電子カルテを含めた記録システム開発を行っています。NCPRは学会公認講習会となり、講習会受講者は平成30年9月の時点で10万人を超え、わが国の標準的な蘇生法として臨床現場で使用されています。また、災害医療対策にも関わらせていただいております。大規模災害時の周産期医療におけるコーディネーターである

災害時小児周産期リエゾン講習会への参画や災害医療システム開発を行っています。

以上のように、私の主な業績はチーム医療やマネジメント、さらに人材育成ということであり、教授になられている他の先生方とは、そのキャリア、業績が大きく異なっていると思われれます。

今回、20年ぶりに自分の新生児医療の原点である施設に戻り、そのリーダーとして運営を任せていただくこととなりました。教授着任後、まずはチーム形成と診療の充実、学生・スタッフ教育に重点を置き、足元をしっかりと固めることから取り組んでいます。

一方で東京女子医科大学は早稲田大学工学部との共同研究や遺伝子診療部の研究成果には目を見張るものがあり、着任数か月で既に多くの共同研究がスタートしています。人工知能(AI)や画像解析による臨床評価法、モニターの開発、遺伝子治療や再生医療など、新生児医療では未開拓の分野に取り組まさせていただくチャンスを得ています。私の役割はこれら新しいテーマに取り組むための仲間を増やし、大学の部門間の連携を円滑にし、そして、わが国、さらに世界の仲間と共同で取り組んでいけるシステムを作っていくことであろうと考えています。

また、これまで本センターはわが国の新生児医療をリードする役割の一端を担ってきました。わが国の新生児医療に関する医学的、社会的貢献も今後も継続して求められています。

小児科医、新生児科医として新生児医療に継続して関わらせていただけてきました。医師になってからずっと赤ちゃんの医療に携わることができているのは、実に幸運なことだと感謝しています。「物言えぬ赤ちゃん」の代弁者として、「赤ちゃんのご家族の幸福のため」に努力するというを自分自身の信念として、母子総合医療センターを継続、発展させていきたいと思っております。

讃樹會同窓会員として、「ひばり」の仲間として恥じぬよう、これからも努力していく所存です。最後になりましたが、皆様のますますの御活躍をお祈り申し上げます。

略歴

平成4年3月	香川医科大学医学部卒業
平成4年4月	新潟大学小児科入局
平成9年	東京女子医科大学母子総合医療センター 助手
平成10年	新潟大学医学部小児科
平成14年	東京歯科大学市川総合病院小児科 講師
平成17年	埼玉医科大学総合医療センター総合周産期母子医療センター 講師
平成18年	東京女子医大八千代医療センター総合周産期母子医療センター 講師
平成21年	新潟大学医歯学総合病院総合周産期母子医療センター 講師、副センター長
平成26年	新潟大学地域医療教育センター魚沼基幹病院 特任教授
平成30年9月	東京女子医科大学母子総合医療センター 新生児医学科教授(現職)

専門領域: 新生児医学全般、新生児蘇生法、災害医療、医療システム開発

新任教授就任挨拶

「教授就任にあたって」

～地域医療の発展が全ての患者さんの笑顔に変わるように～



香川大学医学部眼科学講座 教授
鈴間 潔

平成30年9月に香川大学医学部眼科学講座に着任し、香川県眼科医会の顧問、香川アイバンクの評議員も同時に拝命いたしました。どうぞよろしくお願ひいたします。

香川大学医学部眼科学講座：歴代教授

初代 長谷川榮一教授 斜視
二代 白神 史雄教授 網膜硝子体
三代 辻川 明孝教授 網膜硝子体
四代 鈴間 潔 網膜硝子体

近年は網膜硝子体を専門とする教授が続いていて診療体制が非常に良く整っています。網膜硝子体手術の多い施設として全国的にも有名で加齢黄斑変性の症例も多くOCTなどの診断機器も充実しています。廣岡一行准教授のご尽力により緑内障手術と基礎研究の実績もあり、スタッフの人数は多くはないですが、それぞれがプロフェッショナルの自覚をもって働くプロ集団と言えます。ですから私に与えられた使命はプロ集団が個々の実力を遺憾なく発揮できる環境を整えること。それと大学医学部の役割はいろいろあると思いますが、医師を産み出すのは大学医学部にしかできませんので未来の医療を支える眼科医師を発掘し育成することと考えています。

私の出身は和歌山県の有田というところでミカンの産地として有名です。子供のころから剣道少年で大学でも全学の剣道部に所属しておりました。医学部を卒業後は京都大学病院、和歌山赤十字病院（現日赤和歌山医療センター）、京都大学大学院を経て、米国ボストンのJoslin糖尿病センターで糖尿病網膜症の研究に携わりました。網膜硝子体手術を専門としていますが緑内障手術もします。



留学後、助教を経て静岡県立総合病院の眼科長として赴任しました。静岡県内の眼科といえば西部には浜松医大、東部には順天堂大学附属静岡病院がありますが静岡市近辺の静岡中部にはそのような突出した病院眼科はなく市立清水（山梨大）、清水厚生（岐阜大）、県立総合（京都大）、静岡日赤（慶応大）、市立静岡（京都大）、静岡済生会（名古屋大）、静岡厚生（浜松医大）、焼津市立（浜松医大）、島田市民（京都大）、藤枝市立（京都府立医大）：（当時の派遣医局）といった眼科医1～4人規模の病院と先輩の診療所の先生方とで眼科医療を担っていました。派遣医局の専門領域で役割分担し、協力しながら勉強もできました。静岡時代に眼科運営と病診連携を学ぶことができたと思います。

その後長崎大学に勤務しましたが長崎ではまったく違う環境でした。長崎県内の病院は基本的にほとんど長崎大学の関連病院でした。九州は鉄道よりも高速道路が便利で車社会なのですが（四国も似ていますでしょうか）、狭いようですが実は九州新幹線ができるまでは九州内の移動は結構時間がかかりました。ですから長崎県内の症例は基本的に長崎大学に集まってくるようになっており、京都や静岡ではあまり経験しないようなめずらしい症例も経験することができました。また離島が多いことから医療アクセスがあまりよくないため増殖糖尿病網膜症や増殖硝子体網膜症などのとんでもない重症例も多く経験することができました。長崎時代に網膜硝子体術者として非常に多くのことを学びました。

その後、8年ぶりに京都大学に戻りましたが、京都大学では網膜硝子体手術と糖尿病網膜症、網膜中心静脈閉塞症（CRVO）などの網膜循環障害を担当しました。これまでの経験を活かして何か母校の役に立てることがないか考えた結果、まず3D手術記録システムによる手術教育に取り組むことにしました。外科手術はなんといってもまず経験が重要です。ハイビジョンカメラによる3D記録により実際の手術の臨場感を体験することができ、知識・技術を全員で共有することにより、スタッフ全員のレベルアップ、手術成績の向上、手術件数の増加に貢献できたと思っています。

京都で再び教授の交代に携わった後、香川大学でお世話になることになりました。香川大学でも教育、研究を続け香川県の最終病院としての役割を果たす所存です。チーム医療には信頼関係、教育には愛情が必要です。患者さん、学生、教室員に対して、家族のよう

に愛情をもって接していくつもりです。家族のようになれば全てに優しくなれると思いますし、愛情を持って接するとその想いは周りにも広がると思っています。最終的には、地域医療の発展が全ての患者さんの笑顔に変わる。そんな夢を持った人材を育てることが目標です。どうぞよろしく願いいたします。

学歴

昭和62年3月2日 和歌山県立耐久高等学校卒業
昭和62年4月1日 京都大学医学部入学
平成5年3月24日 京都大学医学部卒業
平成7年4月1日 京都大学大学院医学研究科博士課程(外科系専攻<視覚病態学分野>)入学
平成15年3月24日 京都大学博士(医学)

職歴

平成5年5月16日 京都大学医学部附属病院(眼科研修医)
平成5年10月1日 和歌山赤十字病院(眼科研修医)
平成10年10月1日 米国Joslin Diabetes Center (Research Fellow)
平成13年4月1日 京都大学大学院医学研究科(眼科助手)
平成18年4月1日 静岡県立総合病院(眼科総括医長)
平成20年7月1日 長崎大学大学院医歯薬学総合研究科(眼科講師)
平成22年5月1日 長崎大学大学院医歯薬学総合研究科(眼科准教授)
平成26年8月1日 京都大学大学院医学研究科(眼科准教授)
平成30年9月1日 香川大学医学部(眼科教授)

ニュースの窓

平成30年度香川大学医学部医学科同窓会讃樹會香川本部懇親会 讃樹會香川本部懇親会

—香川大学医学部のいま—



讃樹會副会長 星川 洋一（平成2年卒・5期生）

平成30年9月27日（木）、午後7時より、高松国際ホテル「瀬戸の間」において、香川大学医学部医学科同窓会讃樹會香川本部懇親会が開催されましたので報告いたします。

今回の本部懇親会は、平成30年2月に開催された、香川大学医学部附属病院長・副病院長と県内で開業されている同窓会の先生方との懇談会（9月1日発行の同窓会報第56号に特集記事として掲載）において、横見瀬病院長から、大学病院と同窓会がお互いをよりわかりあえる関係が作れる会を定期的に開催してはどうかのご提案を受け、初めて開催されたものです。

附属病院からは、大変お忙しい中、横見瀬裕保病院長、門脇則光副院長、横井英人副院長（11期生）、星川広史副院長（5期生）、日下隆副院長（6期生）、南野哲男教授、下野隆一教授、白神豪太郎教授、辻晃仁教授、岡田宏基教授にお越しいただき、同窓会員と合わせて70名の出席者となりました。

安田真之先生（12期生）の司会のもと、まず佐藤清人讃樹會会長（4期生）から、今回開催に至った経緯

も含め、開会のご挨拶がありました。

引き続き、横見瀬病院長から、附属病院の再開発による施設整備や外来・入院患者の受け入れ体制の強化等についてご報告があり、今後地域の医療機関とのさらなる連携強化のため、患者紹介など同窓会の先生方の一層の協力をお願いしたい、とのご挨拶をいただきました。

濱本龍七郎讃樹會名誉会長（1期生）の、大学との一層の連携強化のためこのような会を定期的に開催したい、との乾杯のご挨拶を合図に、立食による懇親会がスタートしました。

出席者は、1期生から29期生まで、また勤務先も大学をはじめ県内各地の中核的な病院から、地域医療を支える医療機関、開業医の先生方と幅広く、まさに香川県の医療の大きな部分を同窓生が担っていることを再認識いたしました。

大学以外の同窓生にとっては、同じ県内とはいえ、専門分野の違う大学の先生方、まして病院長や教授の先生方と直接話す機会はなかなかありませんの



佐藤清人会長



横見瀬裕保病院長



濱本龍七郎名誉会長



大西宏明理事長

で、大変貴重な機会となりました。

また、勤務医と開業医の先生方の交流の機会、学年同窓会と違い幅広い世代の交流の場ともなり、医療連携の基本となる顔の見える関係づくりに大いに役立ったものと思います。サッカー部のように集合写真を撮るグループも見られるなど、終始和やかな中、あっという間に予定の時間となりました。

最後に、大西宏明讃樹會理事長（1期生）から、大学には医師育成、研究、高度医療とあらゆる面で香川県の医療の中心的な役割が期待される、同窓会と連携協力し香川県の地域医療を共に支えていきたい、との締めのご挨拶があり閉会となりました。

参加者からは、土日は何かと予定があり平日開催で参加しやすかった、大変よかった、ぜひ毎年開催して欲しいなどの声が聞かれ、終了後2次会に向かうグループも見られました。

これまで、各支部では懇親会が開かれてきましたが、今回本部として附属病院の先生方にも参加いただいて初めて開催することができました。今後も、さらに有意義な会となるよう工夫しながら、継続的に開催できればと考えておりますので、その際には多くの同窓生の皆様のご参加をお待ちしています。





人見浩史先生教授就任記念祝賀会に参加して

讃樹會名誉会長

濱本龍七郎（昭和61年卒・1期生）

平成30年8月19日（日）にリーガホテルゼスト高松において人見浩史先生の教授就任記念祝賀会が開催されましたので参加報告をさせていただきます。

最初に70名近い参加者全員による記念撮影が行われた後、司会の循環器・腎臓・脳卒中内科医局長野間貴久先生による開会の挨拶で祝賀会が始まりました。

まず京都大学iPS細胞研究所教授長船健二先生が来賓として祝辞を述べられ、人見先生が温厚な人柄で研究に熱心に頑張られていたことを称え、香川に籍を置きながら6年間、京都と往復されていたとご苦労を労られました。

続いて讃樹會名誉会長として私濱本がお祝いの言葉を述べさせていただきました。

「この度は、人見先生教授ご就任おめでとうございます。人見先生は現役で入学され平成8年のご卒業11期生です。讃樹會は現在、卒業生3158名、大学院修了会員7名、特別会員41名、名誉会員61名、賛助会員1名、準会員704名、計3972名の会員がいます。そのうち919名が香川県内に勤務・在住しています。

人見先生のおられた薬理学教室の安部陽一先生は、お名前の通り明るく学生に人気のある教授でいらっしゃる、薬理学教室のルーツです。私も尊敬申し上げている教授であります。薬理学を希望していましたが、残念ながらお誘いがなかったので今のような状態です。2代目の西山成先生は、母校初の母校教授です。30代で就任され、人柄もよく多くの人脈をお持ちです。その人脈を研究に生かしておられるエリートであり、10年に一人の逸材でございます。

そういう歴史のある教室からまた一人、教授が誕生した事を、卒業生を代表してお祝い申し上げ、おめでとうございます。

卒業生は49名が教授に就任していますが、人見先生は48人目の教授就任となりますので、AKB48になぞらえて、KMS48と記憶しておい

てください。「実るほど頭を垂れる稲穂かな」「iPSひとみと平和でアイピース」を捧げます。誠にありがとうございます。」

続いて、香川大学医学部薬理学教授西山成先生が乾杯の音頭をとられ、会食となりました。会食の間、祝電・メッセージの披露、医学部吹奏楽部による演奏会が行われました。

引き続き、来賓の香川大学医学部消化器・神経内科学教授正木勉先生、国立病院機構高松医療センター前病院長水重克文先生から祝辞が述べられました後、讃樹會会長佐藤清人先生、阿南共栄病院・阿南中央病院統括院長 香川大学医学部薬理学同門会理事 玉置俊晃先生、香川大学医学部薬理学准教授中野大介先生からそれぞれ記念品、花束が贈呈されました。

最後に人見浩史先生からお礼の挨拶があり、これまでの経緯とさらに今後の抱負として、iPSを使って世の中に役立てたいという熱い思いが語られました。

先生の益々のご活躍を心よりお祈り申し上げます。



西山 成教授

人見浩史教授

濱本

杉元幹史先生教授就任記念祝賀会に参加して

讃樹會名誉会長

濱本龍七郎（昭和61年卒・1期生）

JRホテルクレメント高松「飛天」の間において、2018年10月14日（日）13：00に杉元幹史先生教授就任祝賀会が開催され、参加者130名にのぼる華やかな式典でありました。讃樹會名誉会長としてご招待いただきましたのでご報告申し上げます。

司会進行役の香川大学医学部泌尿器科常森寛行医局長による開会宣言の後、ご来賓の香川大学学長笈善行先生、香川大学医学部長上田夏生先生、りつりん病院副院長大橋洋三先生から祝辞がありました。引き続き、西日本泌尿器科学会理事長九州大学大学院医学研究院泌尿器科学分野教授江藤正俊先生の乾杯のご発声があり、祝宴に入りました。

しばらく和やかな歓談がありましてから、ご来賓の香川大学名誉教授竹中生昌先生のご祝辞があり、引き続き、濱本からお祝いの言葉を申し上げました。

「杉元先生、教授就任まことにおめでとうございます。杉元先生は香川医科大学3期生として昭和63年にご卒業されました。卒業生は現在33期生となり総勢3158名で、県内には919名がおります。杉元先生は学生時代から剣道に熱心であり明るい性格で人気があったと聞いています。卒業後、泌尿器科に入局され、外病院に勤務後、平成13年に笈先生が二代目教授に就任後、平成18年に講師として大学に帰局され、平成30年に教授になりました。全国で49番目、母校出身の母校教授では12番目でございます。教授になるには、運と実力が要ります。彼の最大の運は笈先生に出会ったことだと確信いたします。御令室様は5期生旧姓田中由佳先生で、大変明るい人柄でその奥様の内助の功のおかげだと思います。



最後に短歌で締めくくりたいと考えています。

三代目 杉元教授 なりにけり

天にそびえる 泌尿器科」

引き続き、ご来賓として、前高松市病院局高松市病院事業管理者塩谷泰一先生、坂出市立病院長岡田節雄先生の祝辞がありました。

記念品と花束贈呈の後、杉元幹史教授から感謝の言葉があり、香川県の医療、母校のために人材の育成に力を注ぎたいと決意を述べられました。

最後に腎・泌尿器科くにとみ医院院長で香川大学医学部泌尿器科学同門会讃起会理事長の國富公人先生の中締めのご挨拶があり、閉会となりました。





第9回讃樹會市民公開講座 開催報告

2018年12月1日(土)、16:00~17:00

講師 中村 祐 先生
 香川大学医学部精神神経医学講座
 講師 中村 祐 先生
 讃樹會会長 佐藤 清人 先生
 理事長 加藤 中央病院 企業団 企業長

・香川大学医学部同窓会の歴史
 医療法人社団 香川大学 医療院院長
 讃樹會名誉会長 濱本龍七郎先生

星川 洋一 (平成7年卒・10期生)

恒例となった第9回讃樹會市民公開講座が、12月1日土曜日、サンポート高松で開催されました。12月に入りましたが、暖かく穏やかな天候にも恵まれ、今年も定員100名の会場がほぼ一杯になる盛況ぶりでした。開会に先立ち、濱本龍七郎名誉会長（1期生）から、「香川医科大学・香川大学医学部同窓会の歴史」と題して、香川医科大学開学当時の写真なども紹介しながら、大学及び同窓会の歴史と、現在、正会員が3千人を超え、そのうち約900人が県内で医師として活躍していること等のご報告がありました。

次に、中村文洋副会長（10期生）から、県内唯一の医学部として、県民への恩返しの一つとしてこの講座を開催していること、今回は県民の関心の高い認知症をテーマに選んだことなどについて開会のご挨拶があり、引き続き、佐藤清人会長（4期生）が座長となり、講師である香川大学医学部精神神経医学講座教授中村祐先生のご略歴と演題「動画で見る認知症の症状とその対応」が紹介されました。

講演では、中村先生が自ら監修されたビデオ動画を使って、認知症の初期症状やうつ病などとの鑑別、物とられ妄想や興奮、易怒性といったBPSDの背景などについて、わかりやすくご説明いただきました。動画は、受診や料理、カラオケなど具体的な日常生活の場面をドラマ仕立てにしたもので、役者の演技も素晴らしく、先生の解説についても、場面ごとにクイズ形式をとって参加者の興味を引きながら、空間的失認や実行機能障害、記憶障害、被害妄想など、言葉だけでは一般の方に説明するのが難

「動画で見る認知症の症状とその対応」をご講演中の中村祐教授





プロローグとして同窓会の
歴史を語る濱本名誉会長



座長の佐藤会長



開会挨拶の中村副会長



閉会挨拶の星川副会長

しい内容について、理解しやすいよう工夫されたものとなっていました。

また、それぞれの場面や症状等について、周囲の望ましい対応方法についての具体的なお話もありましたので、参加者にとっては、今日からでも役立つものとして、大いに参考になったことと思います。

その後、会場からは、高血圧など生活習慣病との関連、遺伝の可能性、若年性認知症、治療などについて多くの質問があり、それらにも一つ一つ丁寧に答えいただきました。参加者皆さんにとって、大変有意義な講演会となりましたこと、心より感謝申し上げます。

最後に、副会長の私、星川洋一（10期生）から、講師と参加者へのお礼と、今後も大学と連携し、香川県の地域医療に貢献していくとともに、このような講演会も続けていく旨挨拶があり、盛会の内に終了しました。



満員となった会場風景

香川大学医学部附属病院 平成30年度医師臨床研修マッチング結果報告

卒後臨床研修センター センター長（専任医師）
松原 修司（平成4年卒・7期生）

讃樹會におかれましては、平素より本センター活動への格段のご理解とご支援を賜り心より感謝いたしております。お陰を持ちまして、医師育成を通じて母校への貢献に繋がるマッチング結果を継続できておりますことをこの場をお借りし厚く御礼申し上げます。

平成30年医師臨床研修マッチング結果は、2018年10月18日に公表されました。本院のマッチ者数は40名でした。さらに二次募集で本学生2名が希望し、あわせて計42名が2019年4月より本院で研修開始予定です。全国国立大学病院（42施設）において自大出身者数39名は第3位であり（別表）、マッチング累積数では中国四国国立大学病院では上位に位置しています。（図1）。今年度のマッチングは特に厳しい状況でしたが、在学生を中心に本院卒後臨床研修を強く支持してもらえました。感謝の気持ちとともに、期待に添えるよう研修体制の提供に努めたいと思いを強くしております。

地域医療の充実の為には、本学生だけでなく県外医学生（他学出身者）に、より多く本院卒後臨床研修に参加してもらえることが重要と考えております。2020年度から卒後臨床研修制度の大幅な見直しとなり、7科目必修化に加え「外来研修が必修」となります。見直しに対応した新研修プログラムの準備を進め、病院見学にお越しいただいた際に、新プログラムをしっかりと説明出来るようローテ・研修内容等の説明資料の準備を進めています。讃樹會会員のご家族・お知り合いの方にお勧めいただき、本院の卒後臨床研修の見学にお越し頂ければ幸いです。

平成17年に本院のマッチング結果は最下位に陥り、当時の病院長 長尾省吾先生（前香川大学学長）を中心に卒後臨床研修センターの体制強化が推進され、私は平成18年5月から本センター専任医師として務める機会に恵まれました。この12年間で、本院の研修修了者は約400名余りとなります。平成29年10月末には、西5階病棟に卒後臨床研修センターの移転が実現し、他大学に負けない研修環境を整備して頂きました。また、本院診療科指導医の熱意ある指導のお陰を持ちまして、修了者の約85%が入局のうえ、修練・研鑽を行っています。

医師育成には10年以上の期間を要し、すぐに成果はあらわれません。そのため、毎年のマッチングを大切に、研修医を迎え、修了に導くこと、本院診療科への入局につなげるのが本院の発展につながる確実な道と考え努力してまいりました。私一人が診療することには限りがありますが、卒後研修修了後に、より多くの医師が様々な診療科に入局することにより、本院の診療力が拡大し、本院ならびに県内の地域医療の充実につながります。毎年、同様なことの繰り返しであり、多くの研修医のサポートには非常に手間がかかります。私の就任当初から長年支えてくれた事務スタッフの貢献は大きく、スタッフの力なくしてはマッチング成果につながらなかったと感じています。

平成の時代が終わろうとしています。在任中の12年間、懸命に努めてまいりましたことを同窓会会員の皆様にご報告致しますとともに、今後ともお力添えを賜りますようお願い申し上げます。

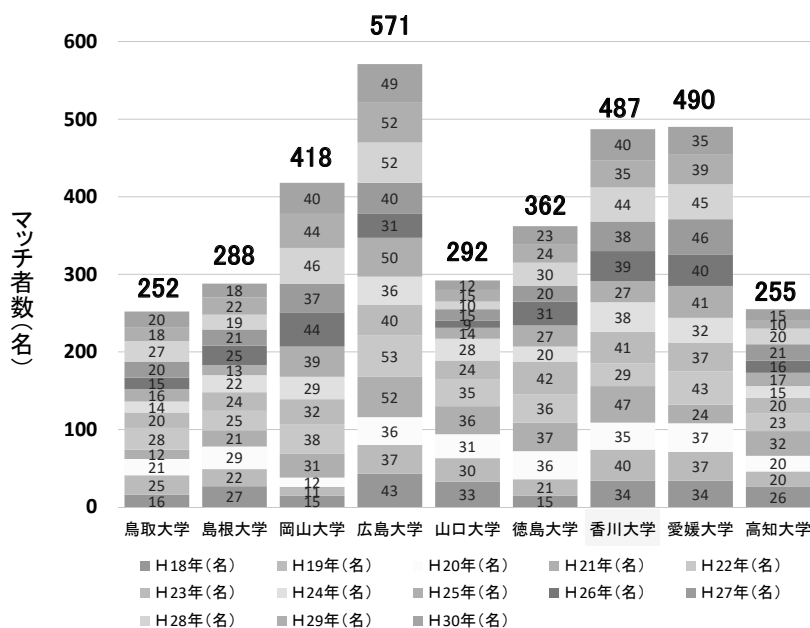


図1 中国四国9国立大学病院 医師臨床研修マッチング者数の累計 (過去13年間)

マッチング数 順位				募集定員に対する 充足率 順位				自大学出身者数 順位						
順位	病院名	募集定員	マッチング数	順位	病院名	募集定員	マッチング数	定員充足率(%)	順位	病院名	募集定員	マッチング数	自大学出身者数	マッチングに対する自大学出身者数の割合(%)
1	東京大学	120	120	1	東京医大	119	119	100.0	1	東京医大	119	119	52	43.7
2	東京医大	119	119	2	山梨大学	40	40	100.0	2	山梨大学	40	40	51	96.2
3	京都大学	78	78	3	鹿児島大	42	42	100.0	3	山梨大学	40	40	39	97.5
4	京都大学	90	73	4	京都大学	78	78	100.0	4	香川大学	48	40	38	97.5
5	神戸大学	71	69	5	東京大学	120	120	100.0	5	鹿児島大	42	42	38	90.5
6	九州大学	68	58	6	神戸大学	71	69	97.2	6	筑波大学	90	73	36	49.3
7	旭川医科	72	53	7	北海道大	38	34	89.5	7	佐賀大学	50	35	36	94.7
8	広島大学	62	49	8	九州大学	66	58	87.9	8	大分大学	58	39	35	89.7
9	新潟大学	55	47	9	岡山大学	46	40	87.0	9	京都大学	78	78	32	41.0
10	大阪大学	61	47	10	浜松医科	42	36	85.7	10	広島大学	63	40	31	63.3
11	鹿児島大	42	42	11	長崎大学	55	47	85.5	11	浜松医科	42	36	30	83.3
12	千葉大学	52	42	12	香川大学	48	40	83.3	12	愛媛大学	52	35	29	62.8
13	山梨大学	40	40	13	筑波大学	90	73	81.1	13	宮崎大学	56	34	28	62.4
14	岡山大学	48	40	14	千葉大学	52	42	80.8	14	東京大学	120	120	27	22.5
15	香川大学	48	40	15	熊本大学	44	25	79.5	15	金沢大学	53	35	27	77.1
16	大分大学	58	39	16	広島大学	63	49	77.8	16	長崎大学	55	47	26	55.3
17	佐賀大学	50	38	17	岐阜大学	36	28	77.8	17	山形大学	50	27	26	66.3
18	浜松医科	42	36	18	大阪大学	61	47	77.0	18	滋賀医科	48	31	25	60.8
19	熊本大学	44	35	19	徳島大学	30	23	76.7	19	九州大学	66	58	21	36.2
20	愛媛大学	52	35	20	佐賀大学	50	38	76.0	20	北海道大	38	34	20	58.8
21	金沢大学	53	35	21	東北大学	42	31	73.8	21	岐阜大学	36	28	20	71.4
22	宮崎大学	38	34	22	旭川医科	72	53	73.6	22	徳島大学	38	22	20	60.9
23	北海道大	38	34	23	大分大学	56	39	69.6	23	香川大学	40	21	20	95.2
24	東北大学	42	31	24	愛媛大学	52	36	69.2	24	鳥取大学	44	20	19	95.0
25	滋賀医科	48	31	25	三重大学	30	20	66.7	25	琉球大学	32	19	19	100.0
26	信州大学	40	29	26	金沢大学	53	35	66.0	26	熊本大学	44	35	18	51.4
27	岐阜大学	36	28	27	徳島医大	48	31	64.6	27	千葉大学	52	42	16	38.1
28	山形大学	50	27	28	富山大学	36	22	61.1	28	鳥取大学	33	18	16	88.9
29	徳島大学	30	23	29	宮崎大学	56	34	60.7	29	神戸大学	71	69	15	21.7
30	富山大学	36	22	30	信州大学	48	29	60.4	30	徳島大学	30	23	15	65.2
31	福井大学	40	21	31	琉球大学	32	19	59.4	31	大阪大学	51	47	4	29.8
32	新潟大学	50	21	32	鳥取大学	33	18	54.5	32	岡山大学	46	40	4	35.0
33	三重大学	30	20	33	山形大学	50	27	54.0	33	香川大学	40	15	4	83.3
34	鳥取大学	44	20	34	福井大学	40	21	52.5	34	東北大学	42	31	13	41.9
35	琉球大学	32	19	35	名古屋大	23	11	47.8	35	信州大学	48	29	13	44.8
36	鳥取大学	33	18	36	鳥取大学	44	20	45.5	36	三重大学	30	20	11	55.0
37	高知大学	49	15	37	山口大学	28	12	42.9	37	山口大学	28	12	9	75.0
38	山口大学	28	12	38	新潟大学	50	21	42.0	38	群馬大学	58	11	8	72.7
39	名古屋大	23	11	39	香川大学	49	15	30.6	39	新潟大学	50	21	5	23.8
40	群馬大学	56	11	40	秋田大学	19	5	26.3	40	名古屋大	23	11	5	45.5
41	秋田大学	19	5	41	群馬大学	56	11	19.6	41	秋田大学	19	5	4	60.0
42	弘前大学	45	5	42	弘前大学	45	5	11.1	42	弘前大学	45	5	4	90.0

13位

12位

3位

別表 42国立大学病院 平成30年度マッチング結果【2018年10月18日】

理事会議事録

平成30年度第二回 平成30年12月4日(火) 20:00~21:00

1) 国外留学助成金の審査・決定

平成30年度第二回国外留学助成金の申請は、橋本一輝先生(H21年卒)1件であり、筒井学術局長による1次審査を経ていることが佐藤会長から報告された。これを受けて理事会による2次審査が行われ、1件の限度額である250,000円満額が交付されることが拍手で決定した。

2) 学会助成金の審査・決定

佐藤会長から、次年度開催の学会の申請が2件あり、現行の計算方式に則り「第31回日本肝胆膵外科学会学術集会」に10万円、「公益社団法人日本超音波医学会第29回四国地方学術集会」に4万円の助成額が示され、全会一致の拍手で承認された。

平成27年度理事会で、学会助成金の年間予算の目安は最大20万円までとされた。その枠を超える申請もなく、これまで予算内で交付されてきたが、本制度については状況を見ながら予算、要項、申請様式等審議継続中であることから、要項に限度額の明記はない。次年度分として既に国際学会「IPOKRa TES JAPAN 2019」への助成20万円が1件決定しているため、次年度予算は、更に今回の2件分を加えた金額以上とする必要があることが確認された。

3) 学会助成金制度について

継続審議中の学会助成金制度のこれまでの審議内容のまとめと、他大学医学部同窓会の学会助成制度を参考資料として以下の3点が審議された。

①年間予算の上限について。他大学の状況は大学によって金額が大幅に違うため、国立大学を参考にして、これまでの執行額や予算の調整から割り当て可能だとみなされる、30万~40万という上限が執行部より提案された。理事会として意見が無かったので、予算案作成に際して執行部もしくは財務担当の先生が決めることになった。

②募集期間について。従来は「6ヶ月前から」であったが、毎年、7月~8月初旬に開催される理事会で審査できるよう、「開催年の前年6月末までに応募」とするよう要項を変更することが執行部から提案され、拍手で承認された。

③応募資格について。他大学の多くは正会員が主催者であることが応募資格となっている。当会の要項も、正会員が主催者であることが条件に明記されているが、主催者だけでなく共催者も事務局長以上は応募資格があるという解釈で弾力的に施行している。そこで、今回、予算の上限が30万~40万円とアウトラインが提案

されたことを受け、予算内で、「正会員が主催者である申請に対して最優先に配布して、余剰を共催者の申請分を勘案して配分する。主催者が複数あり、予算額を超える場合は、主催者の数で等分する」という折衷案の意見が出た。次年度の7月~8月の理事会審査に向けての一つの意見とされた。

4) シンボルフラッグのデザイン案について

平成29年度第1回理事会において、シンボルフラッグの作成について、作成することの承認があったものの、デザインについては、今後長期に使用するものであるため慎重に専門家に依頼するなどして、同窓会全体の承認を得るような形で決めた方が望ましいこととなり、平成30年度定期総会において、作成に対して賛成多数で決議され、予算として10万円の計上が承認された。今回、旗制作の専門業者((株)バンテック本社東京)へデザインを発注し、見積書とデザイン案が審議された。

業者のデザイン案9例に対して出された意見と、細かい英語表記の修正を業者に伝え、更に多くのデザイン案を提出してもらうこと、金額的な見積もりは妥当であることとなった。

5) 会報等送料値上げへの対策について

会報等の発送に利用している佐川急便飛脚ゆうメール便(これまで最安値)の料金が他社に倣って、2018年10月より、1通73円から165円に値上げされた。これまで通りの発送を続けると、年間のメール便料金が2倍以上かかり、通信費を60万円増額する必要がある。資料にまとめられたこれまでの送付状況をもとに、今後の方針(送付対象、送付内容、利用業者)を検討した。

会費の納入の有無に関わらず、会員に何らかの発送を行うことは、異動の有無や送付先の把握に役立っている。

また、輸送費を補うため、会報そのものの制作費を削減するという目的で、会報の紙質を落とす、もしくは部数を減らした場合の見積もりを印刷会社から出してもらったところ、もともと会報一冊の印刷代が非常に安価であり、全体でさほど安くならないことが判明した。ただし、紙質を薄くし、ページ数を抑えることで会報の重量を抑え、値上がりした価格の中でも安い輸送費を利用するよう工夫していくという意見が執行部から出された。

インターネットを利用したメール配信も一つの方法だが、今はまだ、ペーパーレス化はせず、これまで通りの紙の会報及びその他の送付を維持し、今回の輸送

費の値上げに対処すべく、できるだけ安く送付できる方法を模索するよう努力することとなった。

6) HPリニューアルについて

讃樹會ホームページは、過去に外注した時期があるが、初期の制作費用に加え内容を更新する都度、費用が発生して維持費が高かったため、外注をやめ事務局で作成し現在に至っている。しかし、時代が変わり、外注による製作費用が安価になり、セキュリティの安全も確保されており、しかも更新は事務局で自由にできるHP運営が可能となった。

今回、同窓会の総合サポートを事業とする株式会社サラト（本社兵庫）にHPの作成見積を依頼し、デザインを一新するだけでなく、これまでなかった会員情報の変更がHP上で行える内容であるが、リニューアル全体の費用が予算オーバーすること、また翌年から、

毎年の保守契約料が必要であることが説明された。（また、大西理事長から質問のあったスマホやタブレットへの対応は、理事会開催後、依頼会社へ確認し、標準装備されていることが確認された。）

今回は（株）サラトにリニューアルを依頼することが拍手で承認された。HPはどうしても年々古くなるので、何年か毎に業者を選び見積を出してもらい、機能を増やすと費用はかかるが時代にあったHPになるよう更新していくことになるだろうと理事長からまとめがあった。

7) その他

四国厚生支局から、指導医療官募集の記事を讃樹會のHPに掲載依頼があり、費用もかからないことであるし執行部としては構わないとの見解であることが説明され、理事から反対意見がないことで賛同となった。

国外留学助成金 受賞の言葉

平成30年度第2回国外留学助成金授与者

橋本 一輝（平成21年卒・24期生） 東京女子医科大学 形成外科学教室

留学先機関：University of Texas Medical Branch (UTMB)

留学期間：2019年4月～2021年3月

研究課題：「体外循環と細胞シートを組み合わせた血管柄付き再生組織弁の開発」



【謝辞】

この度は、香川大学医学部医学科同窓会「讃樹會」における国外留学助成金に採択いただき誠にありがとうございました。2019年4月から米国テキサス州ガルベストンのUniversity of Texas Medical Branch (UTMB) にてリサーチフェローとして研究生活を始める予定となっております。ガルベストンはテキサス州南部のメキシコ湾に面した島で、UTMBは5つの付属病院、教育研究施設を有する一大医学教育研究複合組織です。研究テーマは、「体外循環と細胞シートを組み合わせた血管柄付き再生組織弁の開発」であります。留学を支援してくれている方々や母校の皆様に恥じぬ様、研究に邁進していく所存です。最後になりますが、本助成金の申請にあたり、快く推薦をしていただきました母校の同窓生である、菅野健児先生（横浜市立大学外科治療学教室）、菅野由梨加先生（横浜市立大学整形外科学教室）、ならびに香川大学医学部医学科同窓会「讃樹會」の皆様がこの場を借りて厚く御礼申し上げます。

平成30年度研究助成金/研究奨励金 受賞の言葉

讃樹會研究助成金受賞ご挨拶

この度は香川大学医学部同窓会における研究助成を賜りましたこと、大変光栄に存じております。審査いただきました先生方並びに本会会員の先生方にこの場をお借りして心より御礼を申し上げます。

私は平成13年（2001年）に本学卒業後、地元である横浜に戻り二年間の臨床研修の後、横浜市立大学脳神経外科教室に入局いたしました。数年間の関連病院での脳神経外科全般の研修の後、2008年から大学に所属し主に脳腫瘍治療に従事して参りました。その中で特に悪性脳腫瘍である神経膠腫（グリオーマ）や中枢神経原発悪性リンパ腫（PCNSL）の診断から手術、化学療法などの治療に携わって来ました。しかしながら現状のアプローチでこれらの病気を治癒させることは極めて難しいことを今に至るまで痛感しております。そこで少なくとも病態の本質に迫り、治療成績を向上させるための手法を考えるためにはより深いレベルでの知識の習得が必要であると感じ、臨床知識とともに分子生物学的、分子遺伝学的知識を得るべく少しずつ研究に身を投じていった経緯があります。2012年より国立がん研究センター脳腫瘍連携研究部門にて外来研究員、2013年より米国マサチューセッツ総合病院（ハーバード大学）脳腫瘍研究所に博士研究員として留学し、グリオーマ並びにPCNSLに対して遺伝子解析などを通じた腫瘍発生や悪性化の機序の解明とともに、脳腫瘍細胞株の樹立を通じた新規治療法の開発に携わって来ました。幸いいくつかの研究成果を得て帰国し現在の活動に至っております。

今回採択いただきました“中枢神経原発悪性リンパ腫に対する遺伝子変異特異的治療法開発に向けたトランスレーショナル研究”ですが、2016年に世界に先駆けて大規模遺伝子解析結果を報告しその中でNF-KB経路の活性化につながる遺伝子異常がPCNSLの80%程度に存在することを明らかにしました。この研究

横浜市立大学脳神経外科

立石 健祐（平成13年卒・16期生）



成果を臨床に応用するためには研究モデルを確立することが不可欠と考え、帰国後よりPCNSL細胞をマウス脳に移植しヒト由来脳腫瘍細胞株を樹立する試みを行っております。これまでに10例のPCNSL細胞株を樹立することに成功しており、この研究モデルを用いて新規治療法の開発を目指すべく基礎研究を行っております。現在臨床医としての活動の傍ら3名の大学院生とともに研究室を立ち上げ、本プロジェクトの他いくつかの研究テーマを掲げ日々研究活動をおこなっております。彼らの指導に際して自由な発想と双方向的な議論に基づく研究の促進化を心がけております。データの解釈や研究全体の方向づけには厳しい視点で望んでいますが、基本的には彼らの好奇心を掻き立てるように彼らの研究現場での疑問や結果に基づく仮説を尊重するよう努めております。資金源の確保や体制づくりなど研究室立ち上げ等での苦労もありましたが、臨床を通じて生じた疑問を基礎研究により探求し、それを臨床に還元するようなアプローチは自身にとってもやり甲斐のある仕事となっております。近い将来研究成果を先生方に報告できるよう努めて参ります。今後共ご指導のほど宜しくお願いします。

このような賞をいただき大変恐縮ではありますが、恥ずかしながら実に怠惰な学生時代を送っておりました。当時スキー部という学業では名門のクラブに所属しており、多分に漏れず勉強もせず、また授業への出席もせずといった生活で全科目再試という学年もありました。留学に際して成績表を提出する必要があり、自身の成績を見る機会がありましたが、全く目を覆いたくなるものでした。このような私でも卒業後には恩師との出会い、患者さんとの向き合い方を経て多少ではありますが自身を改めた所もあろうかと思えます。これから臨床研究者を志す先生方はぜひ気概を持って新しいことに挑戦してみてください。こんな私でもなんとかなっている(?)のかと思えます。

讃樹會研究奨励金受賞の言葉

香川大学医学部附属病院 循環器・腎臓・脳卒中内科

尾崎 太郎 (平成21年卒・24期生)



この度は讃樹會研究奨励金に採択頂き、誠に有難うございます。大変光栄に思うと同時に、一段と身が引き締まる思いです。また、平素より大変お世話になっております讃樹會の皆様、ご指導いただいた皆様に深く感謝申し上げます。

私は香川大学医学部附属病院にて研修を行い、後期研修は腎臓内科・一般内科医として高松赤十字病院で働かせて頂きました。後期研修中は、医師としてのスタンス、人を診るといふ医師の根幹を学び、以降は香川大学医学部附属病院にて腎臓内科医として診療を行う日々となりました。

大学院には2年の診療の後に入学し、現在は腎臓内科診療で出会った腹膜透析療法の研究をしています。腹膜透析は全国でおよそ1万人の方が行っている末期腎不全治療です。自宅で過ごせること、体循環や体環境に非常に優しい点でも素晴らしい透析療法ではありますが、腹膜組織の劣化により長期使用ができないことが問題点の1つです。また、透析液の重要な構成要素であるグルコースは、腹膜組織障害を引き起こし、血糖にも影響を及ぼすことからグルコースに着目し、実験を重ねているところです。グルコースをよりよい

物質に変えることはできないかという疑問を抱く中で非常に幸運であったことは、香川大学にはグルコースを置換しうる希少糖が存在したことでした。希少糖は、抗酸化作用、血糖上昇抑制効果、癌抑制効果など現在も様々な研究が進んでいる物質であり、希少糖を部分的に用いることで、腹膜組織の劣化やグルコースの吸収など、問題点を改善すべく農学部の先生方を含む様々な方に協力していただきながら、現在も切磋琢磨しております。

末期腎不全患者のよりよい生活を維持するため、また、自宅で過ごす時間や幅広い生活スタイルの確立を求めて、希少糖を用いた新たな腹膜透析液の研究、開発に関与できればと思っております。

大学病院では腎臓内科医として臨床を学び、また、そこに繋がる研究を続けて数年が経ちました。後進の育成を含め、自身も大学を離れて地域医療に従事する時期が近づいて来ています。しかし、その時でも可能な限り研究に関わりながら、今後も精進していきたいと思っております。

最後にはなりますが、この度はこのように素晴らしい賞に採択していただき、誠にありがとうございました。

◆◆研究助成金／奨励金 2019年度公募についてのお知らせ◆◆

2019年度より、申請書様式の記載方法が下記の箇所について変更・統一されました。

申請の際にはご注意ください。

応募要領並びに申請書は讃樹會HPからダウンロードしてご利用下さい。

「研究助成金／研究奨励金申請書記入要領」より

6. 申請者の主な略歴 (第6号様式)

現在から過去に遡って記載して下さい。

7. 申請者の主要な発表論文欄 (第7号様式)

最近5年以内に発表されたオリジナル論文を記入して下さい。(解説・総説は含まない)

現在から過去に遡って記載して下さい。

論文の著者は申請者並びに申請者より前の著者を全員書いて下さい。

記入方法に
注意!

近況報告

カンボジア勤務3年目。

野々村秀明（平成13年卒・16期生）



メコン川沿いの遊歩道の賑わい

讃樹會の皆様、こんにちは。平成13年卒業の野々村秀明と申します。

私の近況ですが、平成28年10月よりカンボジアの首都プノンペンで生活し、現地の日系クリニックで常勤医として働いております。

私は香川医科大学を卒業してから約15年間、形成外科医として主に兵庫県・沖縄県内の総合病院で勤務していましたが、何か新しい経験を試みたくて、海外で就職することを選択しました。別に日本で問題を起こして働けなくなったわけではありません（笑）

「なんでカンボジアに行ったの?」「カンボジアで何してるの?」「ちゃんと生活できてるの?」

今までにこのような質問を何度も受けてきました。

まず、データで見るカンボジアですが、人口は約1600万人で、面積は日本の約半分です。首都プノンペンの人口は約180万人で、800万人以上の人口を抱える隣国のホーチミンやバンコクと比べると随分と小規模です。さらに、2017年の一人当たりのGDPは、日本の\$38400に対して、カンボジアは\$1380と圧倒的な

差があり（参考：タイ \$6590・ベトナム \$2350）、一般的なカンボジア人の平均月収は3万円未満と言われています。また、中央年齢ですが、日本の45.9歳に対して、カンボジアは24.4歳であり、かなり若年者層の多い国と言えます。

もともと私は海外旅行が好きで、学生時代からトータル40回くらい、30カ国以上を旅行してきました。中でも東南アジアがお気に入り、老後に移住するのが夢だったくらいです。海外旅行をしていて思うのが、やはり日本人による日本語でのサービスのありがたみです。自分も含め、多くの日本人は異国の地で外国語を話すのはストレスであろうと思います。私も旅行中に滞在先のホテルや飲食店で思いがけず日本人スタッフを見かけたりすると、とても嬉しくホッとした経験を思い出します。その時、いつか自分も海外で不安に思う邦人の助けになればと思ったのが、今回、海外勤務を希望した理由のひとつです。

カンボジアを選んだ理由ですが、実は私自身これまでカンボジアに来たことがありませんでした。数年前、私はシンガポール総合病院という政府系の病院に

留学していたのですが、その時にシンガポールの日系クリニックに勤務する日本人看護師（香川大学卒業）と知り合い、カンボジアの医師求人情報を紹介されました。最初は、「何で俺がカンボジアで働かなあかんねん！」と笑っていましたが、興味本位で見学しに行ったところ、常勤医として採用されることになりました。ですから、最初からカンボジアを希望したと言うよりも、日本人医師が海外で働ける場がカンボジアにあったと言うのが正直なところです。



（筆者）
クリニックのスタッフは日本人7名とカンボジア人6名という構成です。

仕事の内容ですが、現地在住の日本人・外国人およびカンボジア人富裕層に対して、主にプライマリーケアや自分の専門分野である形成外科・皮膚科疾患の診療を行っています。一般に、カンボジアで医師として働いていると聞くと、JICAやNGOでボランティア活動をしているイメージがあるかもしれませんが、今のところそういった活動はしていません。現在、プノンペン市内に日系ではクリニック2件と病院1件があり、その他日本人医師が非定期で働いている地元のクリニックもあるため、おそらくプノンペンだけで日本人医師は常時10名近くいるのではないのでしょうか。ご存知かもしれませんが、カンボジアは1990年代まで二十数年間の内戦の歴史がありました。その影響で現在でも専門スキルのある医療

従事者は少なく、医療水準も高くない状況です。そのため外国人医師に対する需要も多く、私も現地でセカンドオピニオンを求められたり、日本の診療ガイドラインに基づいた治療指針を紹介したりしています。

プノンペンでの生活ですが、意外と快適です。カンボジアは親日国で、国民性は素朴でフレンドリーです。データ上ではアジアの最貧国ですが、貧富の差は激しく、市内はレクサスが走り回り、高級レストランで食事を楽しむカンボジア人も多く見られます。私が住んでいるのは、ボンケンコン1という、各国の大使館や外国人向けの飲食店・高級コンドミニウム（プール・ジム付き）が集まる、外国人駐在員に人気のエリアです。すぐ近くにはイオンモールがあるので、日本の商品も簡単に手に入ります。気になる治安は、引ったくり・窃盗は多いものの、そんなに悪くはないと思います。英語の通用度も高く、米ドルで生活できます。

私はカンボジアに来て初めて原付バイクの運転を経験し、雑踏と排気ガスの中を走り回っていますが、町には勢いと活気があり、成長のダイナミズムを感じます。もちろん日本にいた時の方が給与も多く、安心・安全な生活でしたが、今はこのような好奇心を刺激する毎日を楽しんでいます。今後は、もっと現地社会に貢献できるような役割を果たせたら嬉しく思います。



中国資本の高層ビルの建設ラッシュです。



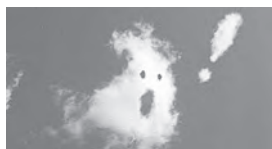
新企画 “趣味ざんまい” とは？

自他共に認める多忙な職業に携わっておられるため、時間は無いはずなのに、趣味のためなら作れてしまう…。

そんな人それぞれに魅力的でますますはまっていく趣味の世界は、外の人からは未知の世界ではありますが、未知だからこそ、興味もあります。更に、たまたま同じ趣味であれば、一気に親しみを感じることもなります。

本企画は、個人的趣味の話が好きだけ語っていただく、医療とは無縁のページとなる予定です。

「あなたのはまっていることを教えてください」



Insect Life

高尾 努 (平成7年卒・10期生)

エッ？高尾が昆虫？そう不思議に思う先生方もおられると思います。確かに学生時代は、昆虫には全く興味はなく、ヨットばかりやっていました。15年ほどの趣味歴ですが、私が昆虫に興味を持ったのは、何を隠そう「ムシキングブーム」からです。それまで昆虫図鑑やテレビでしか見ることのなかったヘラクレスオオカブトやコーカサスオオカブトがホームセンターで売っているではありませんか！コーカサスオオカブトを早速購入し、見よう見まねで産卵させると見事に成功して、それから繁殖にはまってしまい、世界中のカブトムシやクワガタムシを飼育、産卵、繁殖させるようになってしまいました。そして今では飼育のみならず、採集や昆虫標本の収集もするようになりました。今回は私の飼育している昆虫についてお話しさせていただきます。

現在、私は数種類のカブトムシとクワガタムシを飼育していますが、特に力を入れているのはヘラクレスオオカブト原名亜種（ヘラヘラ）と亜種リッキーです。ヘラヘラは人気があり飼育人口が多く、日本での最大個体は全長18cmを超えます。この記録は「むし社」という東京の会社が発行する「ビークワ」という雑誌のカブトムシギネスのコーナーで管理されていて、飼育された虫はこの「むし社」でノギスを使って計測されます。この記録のために全国のヘラクレスブリー

ダーたちはしのぎを削っているわけですが、大きい成虫を作るには、まず幼虫を大きく育てる必要があります。どうすれば幼虫を巨大化させることができるのか、ということですが、いろいろな要素が考えられます。

温度、湿度、エサ（発酵した広葉樹のおがくずを使います）、飼育容器の大きさ、エサに混ぜる添加物、などが考えられます。まず、温度に関しては、高すぎると幼虫が早く成熟し、大きくなる前に羽化してしまい、低すぎるとエサを食べなくなり大きくなりません。また、温度変化が大きいと、幼虫が季節の変化を感じ取ってしまい、早く羽化してしまうので、一年を通して温度を一定に保つ必要があります。添加物は少な



▲幼虫は小型コンテナケースで1頭ずつ飼育され、グラム数や種親のデータなどが記されている。

ぎると栄養が低く、多すぎるとエサのおがくずが早く劣化します。光に関しては、自然の地中では存在しないものなので、幼虫に刺激を与えないためにも飼育室は常に真っ暗にしています。

いくら幼虫が大きくなっても、羽化不全を起こすといけません。私は、羽化不全に関してはマグネシウムやカルシウムなどミネラルが大きく影響しているのではないかと考えており、エサに混ぜる水に硬水を使用しておりますが、このほかストロンチウムなどの微量元素の関与もあるのではないかと考えています。

このあたりを考慮しながら飼育していますが、孵化から羽化まで約2年かかるため、結果を待たずにいろんな条件で飼育する必要があります。そのため大量の個体が必要となります。私は現在およそ400頭を飼育しておりますが、私以外でも、多い人では数千頭を飼育している人もいます。私は、できすぎた虫は昆虫ショップで無料で引き取ってもらったり、ほしいという子にプレゼントしたりします。

また、幼虫は、1つの容器で複数飼育すると、他の幼虫より早く成虫になろうとして羽化が早まるので、基本的にはコンテナ容器で一頭ずつ飼育します。かなりのスペースを必要とするため、現在、昆虫飼育専用の部屋が2部屋あります。それぞれエアコンを24時間365日稼働させているため、多大なコストが必要となります。

条件がぴったり合って幼虫の体重が大きく伸びたり、大きな成虫が羽化した時などは喜びもひとしおです。また虫屋（昆虫業界では昆虫趣味の人を「虫屋」と呼びます）仲間とあーでもないこーでもないと議論を交わすのは大変楽しい時間になります。飼育に関し



◀ヘラクレスオオカブトの幼虫。500円玉と比べるとその大きさがわかる。

てはいつの日か、20cmを超えるヘラクレスを作ることを夢見て奮闘していますが、夏になると山に入ってクワガタをとったり、世界中のいろんな昆虫標本を集めたりもしています。皆さんも一緒にこの素晴らしい Insect Lifeを楽しみませんか。



▲飼育品ではなく、ヘラクレス・リッキーの野外個体。全長約17cmでおそらく日本にある標本としては最大のもの。

国外留学助成金 留学レポート



「アメリカ研究留学のススメ!？」

井上 英樹

(平成15年卒・18期生)

まずこの度、讃樹會の海外留学助成金を頂き、平成26年4月から平成29年6月まで米国ピッツバーグ大学に研究留学できましたことを関わったすべての方にお礼申し上げます。早速ですがレポートを書くに当り、アメリカの土地柄は多くの方が知る所であり、また私のマニアックな喘息研究の内容をお伝えするよりかは、これから留学したいと思っている後輩たちの少しでも役に立つ内容の方が良いと考え、私が留学するに至った経緯を見聞したノウハウを交えつつお伝えすることにします。



写真1：ピッツバーグ大学の構内にはCathedral of Learning（学びの聖堂）という、大学の建物としては全米で最も高い（163m）校舎があります。

準備編1ーコネー

「どうやって外国のラボとのコネを作ったら良いですか？」ー留学を考えている後輩から一番よく聞かれる質問です。普通に日本で生活をしている中で海外の研究者との接点を作るのは難しいです。具体例として私の場合を述べます。私は、京都大学呼吸器内科に入局してから研究留学をしたいという希望を飲み会の席など医局の先生方に伝えるようにしていました。京都大学というとそれだけで留学のコネがありそうですが、私が所属した喘息研究グループにはそういった既定の留学コースはなく自分で留学先を探す必要がありました。当時の上司で現在、名古屋市立大学呼吸器・免疫アレルギー内科の新実彰男教授には事ある毎に留学希望を伝えていました。留学は自分だけであるものではなく、医局に残る先生にも負担を強いる場合もありますから、その調整という意味でも周囲に早めに伝えるのは大事なことだと思います。研究と臨床に忙殺される中、平成25年春季アレルギー学会に新実先生と顔見知りであるWenzel先生が講演に来られるという情報を入手しました。この貴重なチャンスを逃すまいと、学会会場で面接をもらうアポイントメントをとるよう新実先生に頼み込みました。学会当日は新実先

生に同行してもらい、Wenzel先生と面談をしました。拙い英語で今まで行ってきた研究内容や留学中にやりたいことを伝えると、なんとその場で留学の受け入れ可とのお返事をいただきあっさりと留学の運びとなりました。

留学受け入れを交渉するにあたってはなるべく対面で話をする機会を作る方が良いと思います。やはり対面してコミュニケーションを取るとは相手にも安心感を与えます。日本でのコンタクトが難しい場合は、国際学会に参加した際など現地で面識を作るのもよく行われていると思います。私の後任として来た先生はサンフランシスコの国際学会会場でWenzel先生と直接面接にこぎつけていました。

全くコネがない場合はどうすればよいか？ひとつの解決策としては、日本人がすでに留学している（もしくは、していた）ラボをあたってみるという方法です。過去の論文やラボのホームページから日本人が在籍していることがわかれば、その日本人にメールや電話で連絡をとって、留学したい旨を伝えるのです。京都大学時代の後輩はその方法で連絡をとって、その先生の紹介としてラボのボスと連絡をとっていました。まったく面識がない他大学の先生であっても、留学したいという希望を伝えると喜んで協力してくれることが多いように思います。出身大学は関係ありません。自分が留学していたラボに日本人の仲間が増えるというのは同郷の友人が増えるようで嬉しく、応援したくなるものです。

力技として、Nature誌やScience誌などに掲載されている研究者求人情報に片っ端から応募する方法もあります。iPS細胞で著名な山中伸弥先生はこの方法で何十通と応募し苦勞の末留学先を見つけられたようです。ただ世界中の研究者が同じように狙うポストですから非常に狭き門です。私も数通チャレンジしてみましたが、返事がなかったり体よく断られたり、思ったよりも労力のかかる作業であっさりと挫折してしまいました。それよりも上記で述べたようなコネを自分で作り出して、早めに留学して海外に身を置くということが大事なのではないでしょうか。それがたとえ今自分がやっている研究とは異なる領域であっても、自分の研究の見識を広めるという点では少しも無駄ではないと思うのです。研究内容が気に入らなければ、留学中にラボが変わることも不可能ではありません。

準備編2ーカネー

近年のアメリカの研究費削減のあおりを受けて、昔

のように留学して努力すればもらえていた給料が簡単には貰えなくなっています。でもある程度、自分でお金を用意できるのであれば、つまり無給でもよければ基本的にはどのラボでも先程述べたようなコネで大抵は受け入れてくれます。まずは、「留学するぞ！」と決心した日から、頑張っって少し多めに当直バイトをするなりして貯金を始めましょう。それが一番堅実な方法です。次に、日本にいる間に助成金の申込みを積極的に行いましょう。日本学術振興会や上原記念財団などは大きな助成金額を支給していますが、基礎系の研究者の申し込みが多く、競争率も高いです。一方、所属学会に留学助成金制度があれば応募者の多くは臨床医で競争相手も少ないので受給できる可能性は高まります。私自身、当時はまだ博士論文がなく大きな助成金は落選し続けました。かたや同じラボの別の大学から来られていた先生は博士論文を含めいくつか論文があり600万円ほどの大型助成金をもらっていて2年間余裕のありそうな生活でした。私自身は讃樹會の助成金の他、日本アレルギー学会の海外留学助成金100万円を頂き、あとは貯金でまかないました。ちなみに留学助成金の審査基準は論文の内容ではなく、ほぼ論文の数で決まります。必ずしもトップジャーナルである必要はありません。どれだけ論文として形に残しているかが見られています。次に、留学先から給料を貰えるよう粘り強く交渉を続けましょう。留学前は当然として留学後もボスと給与交渉を続けることが大事です。私の場合は、最初の2年間は年間120万円程度。その後何度も交渉して3年目からは年間300万円の給料を頂きました。ということで、私の場合住居費・食費すべて含み、家族3人年間450万円ほどで生活しました。贅沢をしなければ普通に暮らしていけます。一人で留学するのであれば年間300万円もあれば十分ではないかと思います。

準備編3ーイギー

留学の意義は一体何でしょうか？研究で大きな結果を残したい。海外の色んな所に旅行したい。家族とゆっくり過ごしたい…留学の意義、目的は人それぞれだと思います。私が思うに、留学の意義は研究者としての「パスポート」を手に入れることだと思います。私達はパスポートがあれば海外旅行に自由に行き来することができます。そして同じように留学という「パスポート」を手に入れると、研究者として海外の研究者と自由に交流することができるようになります。それまで敷居が高かった国際学会への出席や発表、そして海外の研究者とのディスカッションも国内の学会よりも楽しめるようになります。これらは国内にいただけではなかなか身につけられない技術だと思うのです。

まあ、それはただ単に度胸がついただけとも言えるかもしれませんが…そして、海の向こうにも日本と同じように診療や研究で苦勞している人たちがいて、互いに切磋琢磨する様子を目の当りにすることは、帰国後の研究を継続するモチベーションに繋がると思います。また、外から日本を見るというのも自分の置かれた状況を客観的に見る上で大切なことだと思います。日本の研究レベルはアメリカに比べ勝るとも劣らないものだということが分かります。ですので研究内容を学ぶという意味では必ずしも留学する必要はないのかもしれませんが。

留学は大きく視野を広げる良いチャンスです。臆することなくぜひ皆さんもチャレンジされることを願っています。また留学全般について知りたい方やピッツバーグ大学に留学したい方がいれば、現在私が所属する昭和大学呼吸器アレルギー内科まで個別にご連絡下さい。

それでは、このレポートが香川大学の後輩に少しでもお役に立てば幸いです。

Good luck!!



写真2：留学最後の月のお別れパーティーでWenzel先生から修了証を頂きました。

追悼

藤井 理先生を偲ぶ

消化器・神経内科同門会会長

伊藤 哲史（平成元年卒・4期生）

藤井 理先生のご逝去を悼み、消化器・神経内科同門会を代表して心より、ご冥福をお祈りいたします。

藤井 理先生は、いつも落ち着いておられました。学生時代、授業で出席をとるらしいとなると皆ラウンジや喫茶から一斉に講義室へ走るのですが、先生は「このタバコを吸ってから」と慌てることはありませんでした。結局間に合わなくても悔しがることもなく、「しゃあない、もともと出席してないんやから」と悠然としていました。パチンコがお好きでしたが、勝っても負けても「こんなもんや」と一喜一憂することはありません。そんなのんびりした様子を「寝たきり老人か!」と揶揄する悪友にも平然としていました。

先生は学生時代から肝臓グループへの配属を希望され、平成元年に当時の第三内科に入局されました。それまでの肝疾患治療は漢方薬の内服や強ミノの静注といった方法で炎症の鎮静化を目標としていましたが、非A非B型肝炎と言われていた肝障害の多くがC型肝炎ウイルスによるものと判明すると、各種インターフェロン療法を駆使しウイルスの排除、根治治療が目指されるようになりました。また、肝細胞がんにはベッドサイドでも可能なPEITが導入され、ヘパトロジストには以前と比べ、より高度な技術がもめられるようになりました。先生は新しい時代に最新の医療を習得し、肝疾患に苦しむ患者様の治療に挑もうという高い志をもっておられました。

平成元年、第三内科には一挙に11名の新入局員がありました。ナースステーションには研修医があふれ立錐の余地がなく、看護業務に支障が出ると問題になり朝夕の申し送りの時間は入室禁止になりました。誰が誰だかわからないからポラロイドカメラで撮影された顔写真と名前、ポケベル番号が張り出されていましたが、全員へは院内ポケベルがいきわたらず院外ポケベルで対応していました。指示書の提出が遅い研修医の顔写真はいつの間にか指名手配犯もどきに加筆されていました。こんな混乱した環境のなか、先生の医師生活は始まりました。

インターフェロン療法の開始時には肝生検が必須でしたが、患者様には少なからず不安と苦痛をおかけし

ます。エタノールの注入には激しい痛みが伴います。初代西岡幹夫教授からお教えいただいた、鬼手仏心という言葉に胸に、私たちは肝生検、PEITなどに明け暮れる日々を過ごしました。当時これらの検査や治療法の選択前には、いわゆるムンテラが行われていました。僧侶の資格もお持ちの先生のお話しぶりは淡々としているものの心に深く染み入るようで、高僧の説法を聞いているようでした。患者様の不安を取り除き御家族からも全幅の信頼を得る見事なムンテラでしたが、すでに現在のインフォームドコンセントの要件も十分に満たしていたと思います。研修医わずか3か月目の先生のそれは、指導医の先生をもはるかに上回っており、私は常に聞き耳を立て参考にさせていただいていました。

あれから30年、私たちが採取した肝生検組織は今も正木勉教授の御指導のもと、様々な観点から検証が加えられています。担当の大学院生から藤井先生の所見は繊細、私の所見は大胆（大雑把の尊敬語?）と評されているようですが、研究、治療の貴重な財産として確実に受け継がれています。

先生が肝生検を施行してくださった患者様が今でも私のクリニックを受診されています。IFN療法は無効で、炎症を抑え肝硬変への進展を遅らせる治療を続けていましたが、グループの後輩、香川労災病院 出口章弘先生に御協力いただき昨年寛解に導かれました。30年以上にわたる闘病生活、精神的にも肉体的にも負担の多かったIFN療法などを振り返り、話が肝生検に及ぶと先生のことが思い出され、お互い黙りこんでしまいます。毎月帰り際にいただく「ありがとうございました」という患者さまのお言葉は、先生にも届いているものと思います。

平成の第三内科でご活躍された先生の早すぎのご逝去は、いまだ納得できませんが、先生のお言葉の数々は患者様の心に深く刻まれ、その御功績は永く同門会員に語り継がれるものと思います。ご冥福をお祈りいたします。



「創部ものがたり」

～バドミントン部編～ のどかで楽観的だった創部時代

高松赤十字病院 副院長

大西 宏明 (昭和61年卒・1期生)

【創部まで】

38年前、高松市のはずれの山を削って作られた台地に香川医科大学が作られました。大学とは言うものの、そこには講義棟だけしかなく1学年103人の学生と数名の教官と事務官だけがありました。講義棟のまわりは造成地だったため雨が降れば広大な水溜りができ靴が泥だらけになりました。靴で講義棟に入ると建物の床が土で汚くなるため、今の更衣室の横の通路に靴箱があり学生も職員も講義棟に入るときには靴を上履きに履き替えていました。講堂とか体育館などの気のきいた建物がないため、1期生の入学式は大B講義室で行われました。オリエンテーションが終わり、基礎科目の講義が始まってしばらくした1980年5月20日火曜日に、1期生103人は大B講義室に集められました。学生課学生係長の丸山さんがやってきて「今からサークルを作ります。作りたいサークルがある人は挙手をして申請してください」と、言われました。

「硬式テニス」「卓球」「水泳」「剣道」「野球」「サッカー」そして「バドミントン」などなどの声があがりました。

「それでは、それぞれの入部希望者が集まる場所を指定しますので、そこに集まってください。そして各部の責任者(部長)を決めてください。顧問の先生は学生課が教官の経験など、引き受けてくれそうな先生を紹介しますが、適切な先生がない部は体育学の根木教授が引き受けてくれるそうです。」

香川医科大における部・同好会

誕生の瞬間です。しかし、先輩やOBがいなかったため施設や運営資金などはありませんでした。これらをサポートしていただくための保護者会(ほとんどの学生が未成年でした)である校友会が作られており、そこからの寄付金などを配分するためにBD会議とよばれた部同好会代表者会議(初代議長は硬式テニス部の松下耕太郎君)が定期的に開かれました。

【創部直後の時代：1、2期生を中心に】

バドミントン部は、1期生の沖野毅君、豊後雅巳君、松下誠司君、松村浩明君、山根雅彦君、越智比呂子さん、奥田純子さん、小原徳子さんそして大西の9名で活動を開始しました。高校や中学でバドミントンの経験があったのが、山根君、越智さんと私の3人でした。1年目は大学に体育館が無かったため、高松市内の公立体育館を借りて練習しましたが、ほとんど休部状態

バドミントン部集合写真(1期生卒業アルバムより)



でした。翌年、2期生として、喜多村哲朗君、藤村治彦君、諸富嘉樹君、溝端乃里男君、山本修平君、佐々木由美さん、佐々木敏江さん、網野由香さん、近藤(旧姓高橋)真弓さんが入部してきました。(1、2期生でお名前を失念しているOBの方がおられましたら申し訳ありません。当時の資料が少なく十分な検証ができませんでした)この年には体育館が完成していたためほぼ毎日練習ができるようになりました。藤村君と網野さんもバドミントン経験者だったため、それなりに基礎ができていた部員が増えて、中学や高校で経験していた練習を行いました。その年の8月には富山県の高岡市で行われた西医体に初めて参加しました。今から思えば2年生と1年生だけのチームなんて弱小もいいところですが、当事者たちは楽観的に考えて参加して惨敗して帰ってきました。

その当時、JRはまだ国鉄(日本国有鉄道)で、瀬戸大橋はなく、高松港から連絡船に乗って宇野にわたり宇野線の快速電車で岡山駅に行き、乗り換えて各地に行くのが通常でした。NHKで放送された「半分、青い。」の時代です。(ドラマにでてきた「イカ天」とか「ダイコン」という言葉が注釈なしでそのまま理解できる世代です。)その後は、西医体の前に行われる中四国医歯薬大会にも参加し、知り合いになった四国の医学部のバドミントン部が協力して四国大会が始まりました。これらの大会に参加する時には、庶務だった藤村君の好みもあり、青春18きっぷを買って長時間かけて移動しました。島根に試合に行った時には岡山駅から島根まで鈍行列車で移動したため途中の駅の停車が1時間もあったため、みんなで途中下車して駅を出て市内で昼食をとったことを思い出します。列車もガラガラだったので車両の真ん中に台をおいてみんなでトランプをされていて車掌さんから注意された記憶が

あります。愉快的な部員たちでした。

ところで香川医科大学は1年目から大学祭を行っています。故成松主税さんの強力なリーダーシップにより、わずか1学年103人が全員協力して行いました。全国の新設医科大学のなかでも1年目から学園祭を行ったのは香川医科大学だけであり、学園祭の開催回数(今年は第39回)＝開学後年次になる唯一の大学(今は学部)です。学祭実行委員会から、各部に屋台の出店要請がありました。庶務だった溝端君の提案で、バドミントン部は綿菓子とアイスクリームを販売しました。他の部は色々工夫を凝らしていて、例えば卓球部は手間をかけてピンポン球にみたてたこ焼きを作って販売したりしていたのに対して、私たちはほとんど労力をかけずに安直なことをして、他のサークルからは冷たい目で見られていました。当時のバドミントン部の部風そのもの、気楽で楽観的でした。

【最後に】

38年間でバドミントンはルールが大きく変わり(OBの方々、ご存じですか)、ラケット・ウェア・シューズ・ポールやネットはMade in Japanの最先端技術で劇的に進歩しており、試合のスタイルも変化しています。ヨネックスが、まだヨネヤマだった時代、バドミントンラケットはフレームが木製でシャフトがスチールでした。現在自分が使っているラケットのカタログを見ると、「高弾性カーボンフレーム+レクシルファイバー+ナノメトリック+タングステンおよび高弾性カーボンシャフト+ナノメトリック」となっていました。このような高性能ツールで行われる現代のバドミントンは、木製フレームのラケットの時とは全く違うスポーツと言っても過言ではありません。しかし、コートの高さやネットの高さは当時と変わりません。

OB会で医学部の体育館に行くと、蒸し風呂のように熱い空気や充滿するエアサロンの臭いが当時と全く変わっておらず、練習は苦しかったけれど楽しかった当時のことが昨日のことに思い出されます。

現役部員の皆さんの益々のご活躍と、全国各地で活躍されているOBの皆様のご健勝を願いつつ筆を置きたいと思います。

(2018年7月)

まだ講義棟のみ建つ香川医科大学造成地



//// 第4回 ////

関 連 病 院

紹 介

～香川大学医学部讃樹會同窓会名誉会長による関連病院訪問記～

香川大学医学部医学科卒業生は3100人を超え、900名が県内で医療に貢献しています。一期生卒業後30年以上が経過し、関連病院も数多くなりました。そのうち基幹病院にも医師が多く派遣され中心的な役割を担っています。

当企画は、基幹病院を中心に、その病院の特色、あるいは病院長の医療に対するお考えを、濱本が直接病院長を訪問しインタビューを行うものです。3期目会長を務めておりました前年度から開始しましたシリーズですが、通算4回目となる今回は、2018年11月14日 10:30からおよそ1時間、香川労災病院にお伺いし、吉野公博病院長にお会いして、卒業生の進路等に役立つお話を詳しくご紹介いただきました。 名誉会長 濱本龍七郎

香川労災病院紹介



香川労災病院 院長 吉野 公博



香川労災病院全景 右端が新しい救急棟

讃樹會の皆様、日頃は大変お世話になっております。この場を借りて、御礼申し上げます。さて、平成30年11月14日、讃樹會名誉会長の濱本龍七郎先生が来院されました。濱本先生とお話しさせていただくとともに、当院で勤務されている香川大学の卒業生も参加してお話しする機会が持てました。また、記念撮影も行うことが出来ました。大変、喜ばしいことでもあります。

ここで、香川労災病院の紹介をさせていただきます。現在の正式名称を、独立行政法人労働者健康安全機構

香川労災病院と称します。昭和31年4月に内科、外科、整形外科の3診療科と病床数40床をもって診療を開始し、現在は、19診療科、病床数404床（ICU 8床、HCU 8床）（7対1看護）の規模にまで発展し、急性期・救急医療、がん診療、地域医療の提供に力を注いでいます。平成9年に古い病院からの建て替えが終了して現在の本館が出来上がりました。その後、平成25年、救急棟を新築して1階に救急室を配置し、個室の

診察室や感染対応の隔離室も備えたものとなりました。2階は、外来化学療法室として現在、数多くの化学療法を行う患者さんを受け入れています。3階がICU、HCU病棟です。3階は直接、手術室まで直結しており、患者さんを短時間で手術室まで搬入できるようになっています。本年度、香川県内では、4番目の中西讃では初めてであるスーパーICU基準をとることができ、高度急性期医療が益々充実していくと考えています。手術件数もここ数年は年間約4000件で推移しています。緊急手術も多く、これは麻酔科が常勤10人体制であり、麻酔科の先生方の支えがあって初めて可能なものと考えております。

平成30年12月において、当院の常勤医師数は90名でそのうち、香川大学出身者は18名に上ります。また、非常勤医師は12名でそのうち、香川大学出身者は、4名となっていました。本当に多くの香川大学出身者に勤務していただいていることがわかります。



がん相談支援センター・両立支援相談窓口

診療科について紹介致します。内科は呼吸器内科、血液内科、消化器内科、腎臓糖尿病内科が主たる診療科となっています。香川大学第三内科からは、消化器内科に派遣していただき、活躍してもらっています。上部下部内視鏡検査からERCP、ESDなど多岐にわたる処置が行われています。内視鏡関連の処置は、年間7000件を超える状況です。また、呼吸器内科、血液内科、消化器内科では、がんに関わることが多く、近年、外来化学療法が非常に多くなっており、救急棟2階の化学療法室は毎日、非常に混み合っている状況です。糖尿病外来、また、透析は初期導入から入院での手術患者さんの対応などいろんな病状に対応しています。ここも香川大学第二内科より先生を派遣していただいております。神経内科は長く不在でしたが、これも香川大学第三内科から週2回、神経内科の先生が外来診療に来てくださるようになりました。これにより、これまで他施設へ紹介せざるをえなかった患者さんも労災病院で診療できるようになり、地域の方々にとっても有益なことだと考えられます。呼吸器内科は、西部地区では専門医が殆どおられないなか、当院では丸川副院長以下、4名の呼吸器専門医が勤務しており、他の先生方も呼吸器疾患にも対応しているので、同地区では最も呼吸器疾患に対応できる病院と考えられます。

循環器内科は、地域では多くの心疾患の患者さんを診療しており、年間心臓カテーテル検査は900症例を超す勢いで、心筋梗塞に対するPCIも年間400例に近づいています。多くの症例に対して施行しています。血管撮影装置は2台あり、一台はパイプレンで、いずれも緊急対応できる体制であり、加えてICU、

HCUが十分機能しており、術前術後の対応も十分出来ていると考えています。また、ペースメーカー埋め込み術を積極的に行っています。

外科は、殆どの疾患に対応できていると思いますが、特に乳がんや食道がん、肺がんなどやはりがんにたいする手術が主となっています。加えて、術前術後の化学療法や放射線治療を加えた、総合的治療が行える体制が出来ています。もちろん、緊急対応が必要なイレウス等の緊急手術にも対応して行っています。症例が多いので若い先生方にはよい研修が出来る環境が整っていると思います。

整形外科は、骨折、変形性疾患、脊椎など多くの疾患に対応しています。高齢者が増え続ける時代で、高齢者の骨折も症例数が増えています。また、手術を行う施設の集約化もあり、当院の果たす役割は益々大きくなってきています。術中ナビゲーションシステムを整備していますが、手術器材の充実を今後もしっかり、対応していく予定です。

泌尿器科では、以前から中西讀で数多くの手術を行ってきた診療科です。多くの悪性腫瘍の手術、化学療法、放射線療法を行っており、また、結石破碎装置での加療も数多く施行しております。

産婦人科は、悪性腫瘍の診断、手術、化学療法、放射線療法を長く行ってきており、歴史があります。また、産科では産科病棟のリフォームを行い、妊婦さんに快適に過ごしていただけるようになりました。今後も産科は継続して診療を行い、丸亀市の公的病院としての責務を果たしていく予定です。

脳神経外科は、スタッフ6名で診療を行っていま

す。循環器内科と同様に血管病でくられる救急医療を行っています。t-PA投与やカテーテルによる血栓回収療法をほぼ24時間対応できる体制となっています。緊急手術も麻酔科の先生方に対応していただき、行っております。もちろん、脳腫瘍や脊髄、脊椎疾患の診断、治療も行っています。現在、香川大学脳神経外科から2名の先生が派遣され、一緒に診療にあたっています。

耳鼻科は、頭頸部がん以外の疾患にはほぼ全般にわたって診療、手術を行っています。鼻の手術では、内視鏡を用いて行いますが、ナビゲーションシステムを併用して安全に行えることが出来るようになっていきます。顔面麻痺やめまいといった疾患にも対応しています。

眼科は、外来診療と手術は白内障の手術がメインです。他科入院での合併症の対応などにも対応しています。

リハ科は、リハビリテーションに関して脳外科、整形外科、循環器内科を始め、殆どすべての科からの要望を受けてリハビリを行っています。本年度から本格的に心臓リハビリテーションを始めております。

形成外科は、本年度2名の医師派遣があり、いろいろな再建が行える動静脈吻合術やリンパ浮腫に対するリンパ管吻合術を行えるようになりました。今後も更なる発展が期待できます。

病理は、常勤1名ですが、手術などから提出される



高気圧タンク

標本の病理診断を行っています。非常勤の先生の応援も受けています。

放射線科は、香川大学放射線科より先生の派遣をいただき、感謝に堪えません。内容としては、当院では、herical CT 2台、MRI 2台と通常撮影があり、本当に多くの画像が出来てきます。これらの画像診断だけでも大変なのですが、それ以外にも、エコー検査や血管撮影、化学療法での動注、塞栓術など多岐にわたって診療や治療を行っていただいています。また、放射線治療科では、リニアックを用いて放射線治療を行っています。

これ以外にも、高気圧酸素療法が行える高気圧タンクを備え、一酸化炭素中毒や減圧症、突発性難聴など



吉野公博院長

濱本名誉会長

の治療に使用しています。

また、がん相談や両立支援の相談窓口を設け、がんなどの治療をしながら仕事も続ける手助けを行えるように体制を整えています。

香川労災病院の一つの柱であるがん診療を行うには、診断、手術、化学療法、放射線治療のすべてが出来て初めて完遂できるものであり、当院はそれが行える医療機関と言えらると思ひますが、これも医局の先生方、パラメディカルのスタッフ、病院の事務系、その他の部署の協力があって初めて成り立つものです。その中でも香川大学からの先生方の御協力には、大変感謝しております。今後ともよろしく御願ひ申し上げます。

以上、病院の各科などの簡単な紹介をさせていただきましたが、当院は、小児科、皮膚科以外、殆どの科

がそろっており、症例も多いので非常に充実した研修や実力をつける経験が出来ると思ひます。特に、香川大学の学生さんや研修医、専攻医の先生方で当院での研修など希望されることがあれば、ご相談ください。できるだけ、対応させていただきたいと思ひます。今後とも、香川大学卒業生の讃樹會同窓会会員の先生方の御協力と御支援をよろしく御願ひ申し上げます。

また、讃樹會同窓会名誉会長の濱本龍七郎先生におかれましては、お忙しい所当院までご来院くださり誠にありがとうございました。当院の香川大学卒業生との楽しい懇談の時間を持つことも出来ました。厚く御礼申し上げます。今後ともよろしく御願ひ申し上げます。

香川労災病院に勤務されている香川大学医学部卒業生
(平成30年12月1日現在) 敬称略

<内科>

岩田 康義 (H2卒) 藤岡 宏 (H2卒)
出口 彰広 (H8卒) 吉武 晃 (H15卒)
藤原新太郎 (H19卒)

<外科>

国土 泰孝 (S62卒)

<脳外科>

松本 淳志 (H21卒) 川井 伸彦 (H27卒)

<放射線科>

影山 淳一 (S63卒) 戸上 太郎 (H11卒)

<放射線治療科>

三谷 昌弘 (H3卒)

<麻酔科>

眞鍋亜里沙 (H25卒) 井田 真也 (H27卒)
三溪 雅志 (H27卒)

<研修医>

鶴野 倫子 (H30卒) 徳田 貴大 (H30卒)
福家 共乃 (H29卒) 多々納幹貴 (H29卒)

Series 教授の横顔

聞き手／名誉会長 濱本龍七郎
於 管理棟3F 応接室

小児科学

日下 隆教授

日時 2018年11月29日(木)
13:00~14:00

濱本 本日は大変お忙しい中、対談にお越しいただきありがとうございます。早速ですが、先生は母校のことを熟知されていると思いますが、教授に就任されて大学の印象に何か変化はございましたでしょうか。

日下 特に変化はありませんが、自分はこの大学がとても好きで、母校のために何かしたいという思いは継続して持っています。学生が誇りに思えるような大学であってほしいので、そのためには卒業生、大学、学生が、お互い成長しなければいけないと思います。

濱本 小児科は今、どれくらい医局員がいらっしゃいますか。

日下 院内に20名と大学院生が12名(内3名は院内)、初期研修小児科コース選択6名と、院外への派遣が29名です。

濱本 主な派遣先は、どこですか。

日下 東から行くと、白鳥病院、さぬき市民病院、屋島総合病院、香川県済生会病院、県立中央病院、りつりん病院、坂出市民病院、四国こどもとおとなの病院、三豊総合病院、等です。

濱本 たくさん派遣しておられることに驚きました。

日下 来年から一人は東京の成育医療センターに国内留学します。もっともっと外に出て、海外や国内ナショナルセンターにもどんどん行って欲しいと思っています。

濱本 教育、研究に対するお考えはいかがでしょう。

日下 学生に関しては、臨床能力がつく教育を中心とする方向に完全にシフトしています。研修医の教育に関しても、かつての下働きのような研修医ではなく、必要な手技や知識が効率よく身に着くような教育システムが求められています。ポリクリは、今は「参加型臨床実習」(クリニカルクラクシップ)と言い、ミニCX (Clinical Examination) で、一人20分ずつ面接して診察の手技をチェックするなど、従来の見学型臨床実習ではなく、実際の診療に参加して、より実践的な臨床能力を身につける制度に変わっていますので、私達もその変化に対応するよう努力しています。

濱本 これまでのポリクリも参加型ではなかったですか？

日下 これまではどちらかと言うとベッドサイドで見ているだけですので、実際手を動かしたり、患者さんの診察になるべく参加して、電子カルテを書き、チェックすること

も望まれます。そこまで出来るかどうかは別として。

濱本 そうなればますます基礎に行く人が少なくなるおそれがありますね。

日下 最近EBM (Evidence-Based Medicine “根拠に基づく医療”)を中心に診療が進められていますが、ガイドラインがなかったら診療ができないというのではいけないですから、やはり病態生理と両方考えることができるような人材育成が必要だと思います。最近の流れとして多数の患者さんのデータをもとにどういう治療や診断が有効かを考えていきますが、病態生理を考えた診療も非常に重要で、そのバランスが大事だと思います。だから基礎医学は重要です。

濱本 学位志向はありますか。

日下 大学院を出るということは、そういった研究の経験をしたという証です。仮説を立てて客観的に検証を行い、結果を深く考察する。また英語で論理性のある文章を書いた経験がある、もしくは英語の文献を論理性に応じて検索し参照できる、且つ批判的にその論文を読める、という能力がついたという証だと僕は考えています。

濱本 昔に比べて博士号のレベルは上がってますね。昔は日本語で良かったですから。

日下 大学院は、自分で自由に考えて、失敗してもいいからやる、というそういう風土作りが何よりも大事だと思います。成功を考えて研究を組むのではなく、わからないけれどやってみようという自由な発想は、若い時ほどあると思うので、若いうちにチャレンジしてほしいですね。出来ることをするのではなく、やりたいことをやるでしょうか。

濱本 研究についてはどうでしょうか。

日下 初代の西大鐘壽前教授、そして伊藤進前教授からの研究では、新生児におけるビリルビン代謝、薬物代謝に関する研究は継続してもらっています。僕は新生児の脳循環、酸素代謝、脳機能をメインで継続して行っています。

濱本 それは大学院からずっと続けておられるのですか。

日下 そうですね。以前から酸素障害を防ぐために、どれくらいの酸素濃度にしたらいいのかを調べたり、必要な酸素に加えて水素を少し吸わせることによって脳障害など様々な全身臓器の障害を防ぐという研究をしています。もう一つ特徴的なのは、産科との連携として、胎児、新生児、小児における連続した疾患の診方を考えようとしています。成人病の起源は胎児からと言われています。小児科と婦人科が仲がいいからこそ、できる研究だと思います。

濱本 教授の現在のメインテーマについてはどうですか。

日下 ビリルビンは黄疸の原因ですけど、黄疸は他の動物には殆どなくて、ヒトに特異な現象だと考えられています。

他の動物と比較した場合、特異的な臓器というのは脳だと思われ、脳の酸素代謝と黄疸の関係を結びつけた研究をしたいと考えています。ヒト新生児の場合、酵素活性が低くてビリルビン抱合能が低いのです。それが生まれてから上がるわけですが、胎児期から上がってれば抱合能が高いわけですから黄疸が出ません。ヒトは特異的にそうなっています。

濱本 では、先生は大学院の時はビリルビンを研究されていたのですか。

日下 いえ、僕はミトコンドリアの電子伝達系の中で、酸素を一番代謝するコンプレックス4ですね、サイトクロムCオキシダーゼの酸化還元をin vivoで、生体中でそのまま測定可能か否か研究していました。その結果、それはよほど血液を薄めないと測れない、本当の血液がある状態では測れない、ということが解りました。日本で7~8年一生懸命取組み、そのデータを持ってフィラデルフィアのペンシルバニア大学のB.Chance教授というミトコンドリア研究の大家の先生の研究室に行ったら、測定の可能性に関する論議が15分で終わり、大変に意気消沈しました。このためその大学の小児科の教授に紹介をして頂いたところ、今度は日本の倍のサラリーを出すから残れと言ってもらいましたが、3か月の約束もあり帰国しました。それから測定し易いと考えた、脳の循環に研究の方向を変え、必死で研究しました。その頃は殆ど家に帰ってないですね。

濱本 やっぱりみんな、やってるんですね。

日下 その時はしました。死ぬかと思うくらい一生懸命しました。ははは。

濱本 今の学生に対する印象はどうでしょうか。

日下 とても良い学生がたくさんいると思います。でも中には動機が以前の学生たちと異なったり、ちょっとモチベーションが低い学生もいますね。

濱本 それは、ただ単に医者になつたらいいという考えの人ということですか？

日下 人を治すということよりも自分の生活が中心、つまりサラリーがいいからなりたいたいと言う学生や、全く勉強が追い付かないという学生です。

濱本 勉強が追い付かないというのは？

日下 僕の推測では、受験では与えられた勉強しかしていないため、問題集を与えられてその解き方を習っているのですけど、自分で問題集を買えない。だから僕と一緒に教科書を買って行って教科書にある問題を解いたら十分勉強できるからすぐにやりなさいと言っても、答えが無いからできないと。つまり自分で物事を考えて答えを導き出すということができない、もしくは問題集を失敗してもいいから買ってやってみるといことができない学生がいます。そういう学生たちになぜ医療をしなければいけないのか、自分がなぜ医者にならなければいけないかを考える時間は与えてあげた方がいいのではないかと思います。学生時代にどんどん外国に行ったりして、自分は何者かとか、自分の責任において考えることも大事です。

濱本 与えられたものには得意だけど、創造が苦手な学生がいるということですね。

日下 想像力ということが学生で一番大事ではないでしょうか。

濱本 同窓会や卒業生に望まれることをお話し下さいませんか。

日下 同窓会なくして香川大学医学部はあり得ないと考えます。つまり、香川大学の医学部がこれからもっと発展しようと考えれば、同窓生の力なしには僕は絶対無理だと思います。卒業した先生方がコラボレーションし、尚且つ大学の臨床、教育、研究に共同、協力するというのが何より大事だと思います。

それも様々な援助の方法があると思います。例えば臨床を指導していただく以外にも経済的なサポートもあるでしょうし、今までの自分のご経験を学生に語っていただくなど、それを多面的にさせていただくのが大事ではないかと思っています。

同窓生で活躍されている先生がたくさんいらっしゃるから、そのことをもっと身近に知って、卒業生同士協力し合い、また大学とも密に関係性を作っていく必要があります。今までは自分の専門の領域を極めることに邁進することで良かったかもしれませんが、自分たちの領域の発展や後輩の教育に思いを巡らすことにみんなが一緒になって協力していくという次のステップに進む時期が来ていると思います。

もう卒業生も3000人を越えました。その先生方がまあって、この大学を自分の母校として一緒に誇る気運が生まれれば、大きく変わると思います。うちの卒業生の先生方は、うちの大学が大好きな先生方がたくさんいらっしゃいます。それを实际的に繋いでいくのも僕たちの仕事だろうなと思っています。

濱本 卒業生の母校愛は強いと思います。

日下 その上、面白いし個性もすごい。特に香川医科大学時代の初期の学生たちは個性が強い方々がたくさんいらっしゃる。それがうちの大学の特長です。様々な価値観の先生方がいらしゃって、母校愛というのもそれなりにお持ちで、その先生方がまともなれば、すごく面白い大学になると思いますね。

濱本 新設医大としては教授の誕生もトップクラスですね。

濱本 今後の香川大学医学部の在り方、将来図をどうお考えでしょうか。

日下 キーワードは二つ、一つは四大学連携、もう一つはアジアです。まずは、香川大学の独自性を考えながら、四国の他の大学と連携するというのが最も大事だと思います。そして次にその方向性をアジアに向けて、医療支援、教育、大学院の学生の教育、臨床支援等、そういうことをしていくべきだと思います。アジアとどう協同していくか。貢献ではありません。また香川大学は周産期の講座と小児科と

の関係が非常に良いですから、アジア戦略のキーとして、胎児から新生児、そして小児の情報を集めて、プーリングし、データベース化してそれで疾患予測とか疾患への介入とかそういったプロトコルを作り、それでアジア展開するというを本当はしたいと考えています。それは夢の夢ですね。

濱本 他の3大学はどのように考えているのでしょうか。

日下 同じように考えていると思います。四国4大学連携ですが、例えば小児科の研修医を増やす方策として、今年初めて4大学の5、6年生が合同でキャンプを開催しました。協調する必要はなく地域の特色を活かしながら、大学が集まって何かをするということです。地域循環型臨床研修というのを将来したいと思っています。そうなれば、医師の偏在に関しても一つの起爆剤になるのではないのでしょうか。

濱本 アジアとはどのあたりをお考えですか。

日下 現在、香川大学が国際交流をすすめている地域を中心とした、アセアン地域ですね。今ですとタイ、ミャンマー、ベトナム、ブルネイあたり。もう少し広げると、マレーシア、インドネシア、カンボジア、モンゴル等でしょうか。例えばブルネイは留学先として主にイギリスしかあまり見ていない傾向がありますので、同じアジアとして一緒にしましょうという形で展開していくのが何より大事だと思います。それには香川大学だけでは難しいので、他の3大学と一緒にコラボレーションしての展開が必要です。

濱本 小児科では留学生は受けいれているのですか。

日下 ミャンマーからインモン・タウンさんを博士課程の大学院生として受け入れています。とても優秀な方で、日本語能力試験もN1を取得し私達より丁寧な日本語を使われますし、英語もTOEICは満点に近い才女です。そういう優秀な学生がここにどんどん来れば、もっともっといいことができると思います。また臨床実習をこちらでできるようなシステムも作りたいです。

濱本 たくさんの構想をお伺いして、未来図が広がる思いがします。

日下 小児科的にはこれから日本の子どもの人口が減る状況に直面します。しかし、例えば香川県では周産期死亡率が国内でこの5年間の平均で最も低い、世界で最も低いという素晴らしい医療技術、チームワークがあります。それらを利用し、そのまま少なくなる子どもさんだけに貢献するのではなく、アジア地域全体の必要な子どもたちに貢献していく、という考え方は僕は間違っていないと思います。小児科の発展性を考えれば、どんどん外に出て行ってチームを作り、診療、教育、そして研究を進めていくというのが将来的にいいのではないかと思います。そこが僕の一番言いたいところです。

濱本 本日はお忙しい中、ありがとうございました。

臨床腫瘍学

辻 晃仁教授

日時 2019年1月10日(木)

13:00~14:00



濱本 本日は教授の横顔対談にお越しいただき、誠にありがとうございます。先生は高知のご出身で岡山大学をご卒業後、平成17年に高知医療センター、平成23年に神戸市立医療センター中央市民病院の後、平成27年に香川大学教授に就任されて、今年で4年目になられます。

辻 香川とのご縁を振り返ってみますと、実は随分以前になりますが、香川医科大学が診療科の新設を検討されていた時、高知で腫瘍内科をやっていた私に意見を求められたことがあるのです。これからは癌ではないでしょうか、というような話をさせていただきましたが、まさか自分に御縁ができるとは思わなかったです。

濱本 田邊正忠先生が学長をしておられた頃の話だと思いますので15年くらい前ですね。

辻 はい。高知では、その頃高知厚生病院でホスピスを担当されていた香川大卒業生の原一平先生と知り合い、その後高知医療センターで一緒に働くなど、がん治療での緩和医療で以来ずっと仲良くしていただいています。また、神戸で仕事を始めたときには、甲状腺で有名な隈病院の宮内昭院長、香川医科大学第二外科 助教授をされていた先生ですが、甲状腺のがんの患者さんを抗がん剤の治験に紹介いただいたり、隈病院の先生を腫瘍内科の資格取得のため私の元に研修に派遣いただいたりなど、深い繋がりがありました。私が香川大に赴任した後も香川在住の甲状腺がんの患者さんを紹介いただくなどしています。

また個人的には神戸にいたときに、母が香川大学医学部にお世話になることとなり、眼科で眼底手術をしていただくことができました。その時には何度も高速を使って神戸から香川大学病院に見舞いに来させていただきました。

濱本 かなりご縁があることを感じます。岡山大学の入局はどちらの教室ですか。

辻 呼吸器、血液、腫瘍内科を担当する第二内科でした。

濱本 第二内科を選ばれたのはどうしてでしょうか。

辻 当時の第二内科助教授は高橋功先生、中高の大先輩で、後に高知県立中央病院の病院長としてもお世話になりましたが、大学の高知県人会の先輩として学生の頃から大変お世話になりました。医局をどうするというより、「もう教授に言っているから、ゴルフはやめて(僕は学生時代ゴルフ部だったのですが)第二内科の大学院でがんばれ」と言われてました。

大学院ではまず血液、呼吸器の研修をしたのですが、その後、研修病院で消化器を経験し、すっかり興味がこちらに移り、消化器を専門の一つとするようになりました。その後どんどん抗がん剤に関わるが増え、次第に腫瘍内

科の仕事が増えてきたので、腫瘍内科一本でやっていこうと考えました。

濱本 高知医療センターでは腫瘍内科は先生が立ち上げられたのでしょうか。

辻 そうです。高知、神戸、香川でそれぞれの病院の腫瘍内科の立ち上げに関わらせていただきました。

私が大学を卒業した頃は「瀬戸内海で10年、四国山脈で10年、治療が遅れる」と言われた時代で、大変悔しい思いがあり、20年遅れているといわれたものを全国トップレベルにと思い頑張ってきました。神戸に誘われました時にも、当時の高知医療センターの堀見忠司病院長から、いずれ四国に帰ってきて尽力してほしいと言われておりました。そのことはずっと心に残っていて、香川大にご縁があったことはすごくありがたいことだと思っています。

濱本 高知から神戸に行かれたきっかけを教えてください。

辻 神戸市立医療センター中央市民病院が新病院となるときに腫瘍内科を新設する事となり、がん治療のチーム医療、均てん化、高度先進医療、治験等を専門にしているということで当時の北徹病院長に声をかけていただきました。

濱本 研究についてお伺いしたいのですが、先生は臨床研究ですね。癌とか、治験とか。

辻 そうですね。ただ最近ではゲノム診療が広がってきたので基礎的な研究も増えてきました。今後は基礎の先生方との共同研究などもますます重要となると考えています。

研究の見学先日MGH（マサチューセッツ総合病院）の研究所視察に行く機会を得たのですが、1人のProfessorが持っているラボが、国立がん研究センター東病院のラボよりも広く、その規模の違いに圧倒されました。日本でももっとも基礎研究との共同が必要だと感じました。

濱本 新薬が出る時に、治験を依頼されるのは選ばれているわけですか。

辻 はい、その通りです。各癌腫ごとに治験を実施している施設が30施設程度あり、その中の上位12~13が候補施設に選定されることとなります。上位に入っていれば毎回治験にお声がかかります。今、香川大学腫瘍内科は常時全国でトップテンの評価をいただくようになりましたので、確実に治験がくるようになりました。

濱本 知らなかったです。それはすごいですね。今、オンコロジーがすごいですね。

辻 新薬の効果はめざましいものがあります。現在食道癌や胃癌ではたくさんの方が新薬の治験に参加されていますが、プラセボコントロールで半分の方に新薬が入りますが、ある治験では半分の方のがんが治ってしまったりしています。つまり新薬が実際に投与された患者のほとんどが治るかもといった状況です。がんが治る病気であるといった、そんな時代がやってきました。外来で「抗がん剤治療をしないと予後3ヶ月程度かもしれませんね」とお話ししないといけなかった患者さんが、薬物療法だけで再発なく、経過観察の外来に通っていただくことなども増えてきました。

これは数年前には考えられなかったことだと思います。これらのクスリは2年以内には一般診療でも使えるようになると思います。

濱本 オブジーボも使われているのですか？

辻 はい。免疫チェックポイント阻害剤（免疫療法）としてはオブジーボとキートルーダ、それ以外にも数種類のものがあるのですが、免疫療法と、今までの標準治療との併用などが期待されています。併用することで、抗がん剤だけの効果と、免疫療法だけの効果との相加効果ではなく、相乗効果がひきだされることがわかってきました。おそらく1年後くらいに結果が公表されると思います。そうなると、胃癌や食道癌の治療戦略は完全に変わっていると思います。

濱本 免疫療法の副作用はどうなのでしょう。

辻 頻度はそれほど高くないものの、致命的な毒性も多くみられますので、迅速な対応が求められます。当院での併用療法の治験はもちろん、一般臨床の場での単独療法でも相応の対応が求められます。現在香川大学では癌のホットラインを開設しており、香川がん119番といった取り組みも行っています。何かがん治療で困ったときは、香川大学附属病院に何でも相談いただける仕組みです。困ったときには、いつでも大学病院に連絡してください。

濱本 腫瘍内科に連絡すればいいですか。

辻 はいそうです。各癌腫ごとのホットラインもありますが、腫瘍内科が香川がん119番の窓口になっていますので、どのようなことでも腫瘍内科に相談いただければと思います。

濱本 ここの学生の印象はいかがでしょう。

辻 すごく真面目で、しっかりした学生が多いですね。今は、どの学校でもまじめな学生が多いのかもしれませんが。

濱本 真面目で小粒ですか？

辻 しっかりした芯の強い学生も多いと思います。必修でない初期医学実習で腫瘍内科を選んで、勉強してくれる学生が毎年来てくれています。1年生の初期医学実習の時からずっと腫瘍内科に出入りしている、今5年生もしっかりしていて、将来が楽しみです。最終的に何科にいくかまだ決まって無いようですが、癌に関わる診療科に入りたいといっていますので、腫瘍内科以外でも応援するから頑張れといっています。

濱本 先生の教室は4年目で、今度、女性が入られるとお聞きしています。

辻 はい。初めての腫瘍内科希望の後期研修医ですね。香川大学の卒業生です。最初の1人が香川大の出身で嬉しく思っています。医局員には西内講師、奥山病院講師、村上病院助教など卒業生が多くいるのですが、若手の医局員がいることで医局も活気づきますし、新入局を考えている研修医も声をかけやすくなるのではと考えています。腫瘍内科は今最も人材が求められている診療科の一つですので、1人でも多くの人材育成を行えればと考えています。研修医はもちろんですが、がん治療に興味のある先生方にぜひお声かけいただければと思っています。

濱本 女性がケモをするということに時代の変化を感じます。

辻 そうですね。最近では女性の腫瘍内科医も増えてきています。今この領域で非常に活躍している、聖マリアンナ医科大学の腫瘍内科中島貴子教授も女性です。ね。

濱本 腫瘍内科も人が欲しいですね。

辻 そうです。患者さんの数は右肩上がりに増えています。外来患者さんは消化器内科、消化器外科ばかりでなく耳鼻科や総合内科などからも、毎日たくさんの紹介患者さんをお呼びいただき、各診療科ともスムーズな連携が構築されていると思っています。外来患者数だけではなく入院患者も増え、当初3床で診療開始させていただき、現在は6床となっておりますが、春からは東1階病棟14床が開かれ、それに伴い12床を腫瘍内科関連で運用するようにと横見瀬裕保病院長からお話を伺っておりますので、ますます頑張らなくてはいけないと考えています。あと数名医師が増えれば嬉しいと思っています。

濱本 消化器外科とか消化器内科もケモがあるのですか。

辻 そうです。まだ当科のマンパワー不足もあって、十分な受け入れができていないところもあり、いろいろな先生方にまだまだ負担をおかけしていることもあります。

濱本 先生が来られて大分変わりましたね。

辻 消化器内科の正木勉教授にも消化器外科の鈴木康之教授にも消化器がんの治療の業務分担のご協力をいただいているので、本当にありがたいです。大学病院でこのように診療の協働がうまくいっているところは少ないと思います。また耳鼻咽喉科の先生方とは、星川広史教授のご高配により腫瘍内科が頭頸部癌の抗がん剤治療を担当、コンサルテーションを行わせていただくがん診療の協働ができてきました。こういった協働も全国的に非常に珍しく、また高く評価されています。これにより頭頸部領域の治験でも、香川大学は高く評価されています。現在も4本の国際共同治験を実施するようになりました。耳鼻咽喉科の星川教授はもちろん放射線腫瘍学の柴田教授にもご尽力いただき治験を進めています。

濱本 それはすごいです。

濱本 大学の教育についてはいかがでしょうか。

辻 カリキュラム、授業はしっかり練られていて、なかなか工夫されているのではないかなと思います。たとえば、私は分子神経生物の山本融教授の授業も1コマ担当する機会をいただいています。遺伝子診療や、分子標的薬治療の実際のことなどを基礎の授業の中で話させてもらおうと、学生も、今まで教科書でしか知らなかった内容が実際の患者さんのCTなどの臨床症例として出てくることで、こんなに基礎と臨床は近いのかなどと大変興味をもって聞いてくれます。

濱本 私の病院にも1年生が実習に来るのですが、初めてなので、全てが新鮮で喜んでいますね。

辻 初期研修のプログラムも非常にしっかり練られていて、すごく良いと感じます。学生に、香川大学のプログラムは推薦できますね。

濱本 学生への腫瘍内科としての教育はどのような感じでしょうか。

辻 腫瘍内科学の各論も大事だとは思っていますが、現在の腫瘍学はエビデンスがどんどん入れ替わり、各論どころか総論も大きく変わりつつある状況です。このため細かいエビデンスばかりでなく、学生には癌の患者さんに対する接し方をまず学んでいただこうかと考えています。正しい姿勢で患者さんに接することで患者さんがこちらをしっかり見てくれ、信頼され、患者さんの不安を軽減できることを実際に経験してもらうことがすごく大事なと思っています。ポリクリでは、外来診療を通じ、コミュニケーション能力を高めることを教えています。腫瘍内科だけでなくこの診療科に行ってもバッドニュースは伝えないといけませんし、それをどのようにショックが少なく、受け入れやすい形で話をしてあげるかということが非常に大切です。癌などのつらい事実を正確にかつ受け入れることができるようなステップを踏み、上手に伝えることが大切ですし、それができる事でスキルも向上すると思います。

濱本 やはり、癌と言われたら、結構、神経質になりますからね。

卒業生に望むことはいかがでしょうか。

辻 事情によっては、卒業直後に地元に戻られる卒業生も出るのはある程度は仕方ないと思うのですが、自分の母校の素晴らしさを知っていただき少しでも長く母校で働きたいと感じてもらいたいです。最低でも初期研修は母校で研修していただき、香川大学の良さを感じてほしいですね。さらには香川県内の病院でしっかりポジションにつき、後進を育てるコアになってくれる先生がさらに増えていただけたらと思います。

濱本 もう、医療圏が決まってしまった気もします。30年は変わらないです。

辻 しかし昔ほど変えられない状況ではなくなっているのではないかなと思います。従来、香川大の卒業生の先生方が少なかった病院での香川大卒の先生方が増えてきました。やはり、同窓の先生がたくさん働いている病院には若手の先生方もそこで一緒に働きたいと魅力を感じているようです。

濱本 大学に望まれることはございますか。

辻 大学統合が始まりました。四国も例外ではないと聞いています。その時に、できれば香川大学を中心に統合してもらいたいことになると嬉しいです。これは医学部だけではなく本学とも一緒にやらないといけないことだと思います。今、四国の他の大学との比較で香川大学はすごく伸びているとお聞きしています。

濱本 ブランドではそうですね。一県一医大構想から大分、時代が経ちましたから、確かに今後は統合という方向に進みます。その時にカバーするのは、売上ですね。

辻 そうです。黒字経営が重要だと思います。大学の中で利益を上げる最も重要なものは医学部附属病院だと思っています。科研費とAMED（国立研究開発法人日本医療研究開発機構）のお金と、病院収益の3つ、これで統合の方向性が左右されると伺っています。

病院は外来が新しくなって一気に香川大学医学部附属病院のイメージもリフレッシュしました。一方で、病院経営はますます厳しくなっていると伺っています。医療現場のことをよく知った専門的な知識を持っている事務方と医療者連携でさらにアクティブな病院経営を期待したいです。事務方にはコスト削減にだけ注目するのではなく、病院全体の純利益という俯瞰的な視点でアグレッシブに攻めていただければと思っています。

濱本 現場に精通したプロがいることは必要だと思います。
辻 医師の中でも内科系、外科系と得意な領域が異なります。また附属病院外の同窓の先生方の違った立場からのア

ドバイスなども重要です。これらを集約し、よりよい病院にしていいただければと思います。癌領域は比較的特殊な状況も今後予想されますので、腫瘍内科としていいアイデアをたくさん集め、力になりたいと考えています。

そのためには腫瘍内科がますます頑張らないといけませんので、同窓の先生のご意見、ご指導、お力添えをお願いできればと思っています。

濱本 新しい時代を、力を合せて乗り切っていければと思います。今後とも何卒よろしく御願います。本日はありがとうございました。

支部会・懇親会

「香川医科大学3期入学または3期卒業同窓会」2018/9/9

横井内科医院

横井 徹 (昭和63年卒・3期生)

卒業後30年、今回が初めての開催となった「香川医科大学3期入学または3期卒業同窓会」の報告をいたします。

プロローグ

発端は数年前の秋、三越前「丸亀町壱番街三町ドーム」での同級生との再会でした。研究会参加後ぶらぶら歩きながら南下していた私は、前方にいるガタイのいい大集団に気付きました。無意識に端っこに避けてやり過ごそうとした瞬間（^^、「横井！」と声がかかりびっくり。ラグビー部OB会終わりの集団で、視線の先には岩田修くん、竹馬彰さん、外山芳弘くんがおりました。「お前はジモティーだから二次会にふさわしい店を紹介し同行せよ」ということで合流、とあるお店でプチ同期会となりました。「そろそろ卒業30年だし全体同窓会やろう！」みたいな話も含め盛り上がり解散。その後数年間「塩漬け」になっていたのですが、昨年秋にひよんなことで思い出し、Facebookで勝手に「香川医科大学「3期入学」または「1988年卒業生」」グループを立ち上げたことをきっかけに今回の開催に至ったというわけです。

準備

それまでは、個人的付き合いがある数名の同期生同士交流はそれぞれあったもののその情報が集約されないのが現状でした。一番信頼できる卒業生名簿は讃樹會事務局にあります卒業年度で分類されています。たまたま私の手元には、入学時の1年生学生名簿と6年生時のKMSページがあり、卒業同期のみならず讃樹會事務局で「4期以降卒業」に分類されている入学同期生をできる限り拾い上げたうえで2018年6月初めにひとまずほぼ全員（のはずですが自信はありません…）に案内を出すことができました。Facebookグループに集まってくれた20数名の「コアメンバー」内で所属学会会期を避けるなど調整し日曜日の午後開催と決まり、2018年9月9日、かつて卒業謝恩会を開催した懐しのリーガホテルゼスト高松（卒業当時はホテルリッチ高松）を会場として26名が集まりました。

同窓会当日

今シーズンは台風がやたら多く直撃されると中止の可能性もあったのですが、幸い日本の遠く南方で一つ

発生しただけで当日を迎えほっとした…の東の間、明け方からの豪雨が四国を襲いました。その結果、愛媛県八幡浜市から参加予定であった森岡明さんが特急乗車と同時に運休が決まってしまう急きょ欠席となり残念でした。

少し早めに会場に着いたはずがすでに数人の同級生が。受付に座っているとその後も懐かしい面々が続々とやってきます。なかでも揃って和装のいでたちの外山芳弘・裕子さんご夫妻が一番目立っていましたね。なお、目の前にやってくるまで「あれ、だれだっけ？」と私が思ったのは2人（ここではお名前を公表しません^^）でその2人も声を聞いてわかりました。見た目は当然全員おじさんおばさんです。多くの同期生にとっておたがい卒業以来初めての再会でもありましたが、30年という年月は長いようすが一瞬で縮まります、学生時代に戻ったような懐かしさが会場にあふれました。

いよいよスタートです。司会者として私が「お互いに先生とは呼ばない一日にしよう！（^^）と宣言し、参加者中最年長である浜田健水さんによる乾杯の音頭でスタート！。卒業謝恩会からの30年ぶりに再び司会を頼もうと思っていた清元秀泰くんが春の統一地方選出馬を決断、臨床を離れ準備のため地元姫路に張り付くことになり、どうしようか…って思ったのですが、特に決まったプログラムを用意していなかったおかげで不慣れな私でもなんとか司会の役割を果たせました。

さて、会は始まったもののやっぱり「あれ、誰だ？」という雰囲気会場がそこそこあったこともあり、さっそく自己紹介・近況報告タイムとしました。卒業30年、現役入学で留年せずに卒業しても今年55歳になる学年です。爆笑あり微笑みあり涙あり…。今病気治療中、来週手術をうける！？、工作中突然倒れ緊急入院したがなんとか元の仕事に復帰できた、などなど「個人情報（^^）」が続き披露される中で、医師人生としてとうの昔に折り返し点を過ぎたことを改めて実感するひと時でした。そのほかにも今回残念ながら集えなかった同級生の現況について、療養中とか、難病罹患し現在生活にサポートを要しているとか、現状を一部共有できたことで、ヒトとしても人生の折り返し点を過ぎていることを実感させられもしましたね。さらには学生時代から現在まで、いろんな理由でこの世に別れを告げた数名の同級生の話題もでて皆でしみじ

み振り返りもしましたね。。。

楽しい時間は一瞬で過ぎ去るものです。3時間をフルに使って楽しみ、ようやく小雨になった懐かしい高松の街をあとにして帰宅するもの、これから仕事に向かうもの、そして二次会に向かうもの、それぞれ今後の再会を約束して散会となりました。その後のJR高松駅前での二次会にも11名が参加しそれぞれの場所への帰宅の時間まで、懐かしい話で盛り上がりました。なお前日には、東京出張のため本会に参加できない杉元幹史くんの泌尿器科教授就任祝いも兼ね有志8名が集まり夜遅くまでにぎやかに過ごしました。

エピローグ

このたびの同窓会開催に当たり、讃樹會事務局柚山さんには案内連絡等大変お世話になりました、ありがとうございました！！。名簿管理上も連絡先情報などの更新にも少しは役に立ったのかなと思います。

最初の案内の際「これが最初で最後になるかな」的な文章をはさんで皆さんにお送りしましたが、終わってみて、やっぱりもったいないなって思っちゃいました。おそらく今回参加できた皆様全員そう感じていると思いますし、参加したくてもかなわなかった同級生の多くもそう思っていると思います。

「毎年は大変だな。10年後は歳で無理かな（^。^）」

てことで2、3年後をめどに再度集まりましょうかねえ！。当初「めざせ40名参加！」by竹馬彰さん、でしたが残念ながら少し足りず、次回以降はもっと大勢で集えるといいですね！。

今回の企画を通じ同級生メーリングリストに60数名、Facebookグループに29名の参加を得ることができました。今後はこれらのネットワークを活用して連絡を取り合い機が熟したら？2回目も考えましょう！。同期生の皆様今後ともなにとぞよろしく願いいたします！！。

では！！また逢う日まで！！

お願い

3期生メーリングリスト（FreeML）加入は随時受け付けております。メールアドレス等情報をメーリングリスト管理人（私）までお届けいただければ随時登録しますので皆様からの連絡をお待ちします。

yokoitoru@gmail.com yclinic@mail.netwave.or.jp
までお願いいたします。

Facebookの秘密グループ「香川医科大学3期入学または3期卒業同窓会」加入も歓迎します。私まで友達申請いただければグループに登録いたします。
(文責 横井徹(横井内科医院)。文中の登場人物氏名には私が学生時代に呼び慣れた呼称をつけております)



家口尚 生島仁史 柴田真理子 岩田修 井上由実 佐々木豊明 田家諭 竹馬彰 外山芳弘 外山裕子
中村洋之 佐々木清美 西田智子 浜田健水 平尾健一 原田浩臣 前田晃 武田悦子 関本鈴香 宮城和富
宮脇裕史 森口正人 山下潤 吉村裕 平田洋 横井徹
(注:写真の順番とは異なります。)

香川大学医学部剣道部顧問杉元幹史先生教授就任記念祝賀会 平成30年度香川大学医学部剣道部OB会を添えて

池田 敏裕 (平成24年卒・27期生)



香川大学医学部剣道部顧問 杉元幹史先生教授就任記念パーティー 平成30年9月16日 於 リーガホテルゼスト高松

2018年7月1日より香川大学医学部泌尿器科学講座の教授に香川大学医学部剣道部第3期生の杉元幹史先生が着任された事を記念して、2018年9月16日に教授就任記念祝賀会ならびに平成30年度香川大学医学部剣道部OB会を開催致しました。多忙にご活躍される先生方もこの日のために都合をつけていただき、第1期生の先生方から現役部員まで71名と多くの先生方の参加による盛大な会となりました。この会において幹事を執り行わせていただいた事は僭越ではありましたが、当日の写真にはたくさんのOBの先生方が笑顔で写っていらっしゃっており、杉元先生をはじめ多くの先生方に楽しんでいただけた事は非常に嬉しく思っております。

杉元先生は私が剣道部に入部した時にちょうど顧問になられました。入部した時から部員も10名程でやや少なめではありましたが、私が2年生で部長になった時にはさらに減り3名まで減った時期もありました。その後は優秀な後輩が入ったこともあり部員は少しずつ増えていき、現在では剣道部は33名となっているようですが、それまでの13年間ずっと見守って下さったのが杉元先生です。ご多忙にもかかわらず、杉元先生は自ら面をつけて稽古に参加して下さいと多くの部員が刺激を受けました。そのため、最近では西医体での準優勝など部員3人の時代には考えられない様な成績の報告も現役部員から聞くようになりました。私が大学

生であった時、杉元先生からはどのような形でも継続をしていく事が大事という意味で「細く、長く」と教えられてきましたが、杉元先生自身は「太く、長く」剣道部に携わり多大な影響を与えてこられた事と思います。

本会ではOB会も兼ねておりましたので参加いただいた先生には簡単な近況報告をしていただきました。その中には私の研修医時代にお世話になった先生や現在お世話になっている先生もいらっしゃいましたが、本会に参加いただいた全ての先生が県内県外でご多忙にご活躍されていらっしゃる事を知りました。剣道部は過去に何度も西医体で優勝されており、そういった充実した学生生活や剣道への姿勢が現在に直結している様に感じられ、私も他の先生方に負けられないように頑張らなければいけないと強い励みにもなりました。また、ご多忙の先生が多いためこれだけ多くのOBの先生方が集まる機会もなかなか無かったので、現役部員達がOBの先生方と知り合えたのは良かった事だと思っています。

稚拙な文章のため祝賀会が素晴らしかった事やOBの先生方の素晴らしさが十分に伝えられない事を恥ずかしく思いますが以上で杉元幹史先生教授就任記念祝賀会のご報告とさせていただきます。

(編集部：筆者池田敏裕氏は、集合写真 前から2列目左端です。)



杉元幹史教授



第1回岡山讃樹會開催報告

香川医科大学（香川大学）医学部医学科の同窓会を岡山で開催いたしましたので、
 ここにご報告させていただきます。

59名の先生にご参加いただきましたが、過去最大の支部会（地方会？）になったとうかがっております。

2018年10月14日（日）
 ビュアリテイまきび

岡村 暢大（平成14年卒・17期生）

会の発端は、私が実家の病院を継ぐために2017年4月に岡山に帰ったところから始まります。色々な病院や開業先生への挨拶回りで香川の先輩方が多くおられたのですが、皆さんの活躍がすばらしく、こんな人たちが一堂に集まったら楽しいだろうなあと思いました。ある時、お酒を飲みながら、当院脳神経外科の蓮井先生（2期）、非常勤外科の谷先生（7期）にお話したところ、やろうやろうっ！てことになった次第です。〇〇教授はこうだった、あそこの教室は、いつものうどん屋は今、、話題は尽きず、時代は違えど同じ環境で6年間過ごした先輩方とのお話は、良き医師を志した初心までも思い出させてくれました。

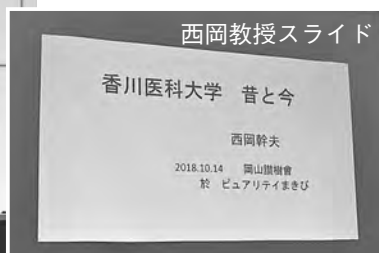
よし、同窓会やろう！

とは言え同窓会はおろか、小さな会さえも開催したこともなく、全くの手探りで始めました。小生の秘書で弁護士でもある三宅さんに色々お手伝っていただき、過去の同窓会を開いた先生方に連絡を取り（戸根沙織先生、内藤宗和先生ありがとうございました）アドバイスをいただきました。発起人会を作り、そこから発信してもらおうと人が集まりやすそうという情報も入り、会の開催までに3回の発起人会（という名の飲み会）を開きました。みなさんのお力を借り、なんとか形にすることができました。会の名称は讃樹會のご許可をいただき、岡山讃樹會とさせていただきます。

本会の司会は発起人最若手の杉原先生にお願いしましたが、元気でパンチの効いたアナウンサーのような名司会！。もう初っ端で会の成功を確信しました。



発表中の西岡教授



開会挨拶 鍛本先生



乾杯挨拶 大本教授

まずは第1期生の鍛本真一郎先生に開会のご挨拶をいただきました。2002年に中四国の先生方を集めて20人ほどで同窓会を開催したお話、その時は連絡手段が電話だったこともあり大変だったことも伺いました。続いて大本堯史先生（脳神経外科初代教授）より乾杯のご発声です。しかしながら、近年の入試差別問題・女性医師台頭のお話から、母校はそのような不正は決してなかったこと、初代学長と推薦入試でほとんどが女性だったことについて熱く討論したことなど、、お話はとても長かったのですが教授の講話を遮るなどできるはずもなく、ありがたく面白くそしてきっちり締まったお話でした。<-と書きましたが、後日あれは長すぎたので反省しているとのお言葉をいただきました笑。

美味しい食事とお酒で歓談を挟み、西岡幹夫先生（初代第3内科教授 名誉教授）にご講演いただきました。「香川大学 昔と今」というタイトルで、香川医科大学ができる前から始まり、基礎も臨床も含めた各教室の昔の集合写真、卒業生が植



名司会 杉原先生



閉会挨拶 岡村

えた記念植樹（特に5期の木が小さいと繰り返しておられ、会場には笑みが溢れました）を披露していただきました。終わりには教え子たちが重要なポストにつき大学を支えていることを嬉しく思っていること、ヘリポートやスターバックスができた今の大学などまでをお話されました。西岡先生がそれらを見ている後ろ姿の写真が多かったので、出席者一同が先生の後をついてまわる（さながら教授回診!）ような感じのプレゼンテーションでした。みなさん大学に戻った気持ちになられたのではないのでしょうか。

西岡先生のお話の後は少し歓談の時間を挟んだのですが、色々なところでお話される輪が出来、昔話に花を咲かせ楽しんでいただけたように思います。最後には私が閉会の挨拶をさせていただきました。会を催すことになった経緯、今後も続けたいとの意思に皆様のご賛同の拍手をいただき御開きとなりました。

皆様のおかげで、本当に良い会にすることができたと思います。以下の発起人の先生方、鍛本真一郎先生（1期）・武田繁雄先生（1期）・蓮井光一先生（2期）・竹馬彰先生（3期）・宮本修先生（4期）・岡田浩先生（5期）・枝園忠彦先生（14期）・杉原雄策先生（20期）、讃樹會の柚山様、ご参加いただきました先生方、事務などを一手に引き受けていただいた三宅さん、他ご協力いただいた方々に厚く御礼を申し上げます。

なお、来年も岡山で開催したいと考えております。今回、医学科の卒業生で岡山に由縁のある方でわかる範囲の方にお声掛けさせていただきましたが、叶わなかった先生方もおられるかと思います。岡山が実家、高校だけ岡山だった、岡山に就職したい、岡山にあこ

がれているなどなど、皆様ぜひご参加いただけますようお願いいたします。岡山讃樹會のメーリングリストも立ち上げておりますので、ご希望の先生がおられましたら岡村までお声掛けいただけますようお願いいたします。

岡村一心堂病院 岡村暢大
okamuu@mac.com

後列 佐藤、喜多村、守屋、吉鷹、蓮井
前列 西岡、大本、鍛本後列 竹馬、吉田、宮島、白髭
前列 森實、平田、田端後列 河合、高吉、高橋、越智、飯田
前列 高間、角南、岡田浩、中尾後列 岡田博、大河、丸山、谷、朝倉、河合
前列 山田、杉山、佐々木後列 妹尾、大島、大原、相田、近藤
前列 杉原、河原、樋本



後列 小河原、岡部、菅田、岡
前列 平尾、伊藤、吉田、松下



発起人(武田先生と枝園先生は参加できず)



後列 藤原、高橋、尾崎、小野、申、中野
前列 辻、宮本



向かって左から
 最後列 小河原、吉田篤史、菅田、朝倉、岡田博、高橋欣吾、守屋
 第五列 角南、近藤、岡、岡部、尾崎、大河、中野、森實、妹尾
 第四列 河原、中尾、高間、申、樋本、山田、佐々木、杉山、白髭、伊藤
 第三列 丸山、平田、平尾、松下、河合、河合、田端、藤原、越智
 第二列 相田、佐藤、辻、小野、高吉、飯田、大原、大島、吉田綾、高橋淳子、宮島
 最前列 竹馬、喜多村、蓮井、鍛本、大本、西岡、宮本、吉鷹、杉原、岡村、岡田浩

※第1回岡山讃樹會は、山陽新聞
 12月22日(土)号朝刊「つどい」
 のコーナーで紹介されました。

第一回岡山讃樹會参加者一覧(順不同・敬称略)

西岡 幹夫	香川大学名誉教授
大本 堯史	岡山大学名誉教授
鍛本真一郎	昭和61年卒 第1期生
蓮井 光一	昭和62年卒 第2期生
吉鷹 秀範	昭和62年卒 第2期生
佐藤 恭久	昭和62年卒 第2期生
守屋 有二	昭和62年卒 第2期生
喜多村哲朗	昭和62年卒 第2期生
竹馬 彰	昭和63年卒 第3期生
辻 武史	昭和63年卒 第3期生
平尾 健一	昭和63年卒 第3期生
平田 洋	昭和63年卒 第3期生
宮本 修	平成1年卒 第4期生
山田 治来	平成2年卒 第5期生
申 正樹	平成2年卒 第5期生
岡田 浩	平成2年卒 第5期生
樋本 尚志	平成2年卒 第5期生
秋山 正史	平成3年卒 第6期生
田端 りか	平成3年卒 第6期生
河合 俊典	平成4年卒 第7期生
河合 友子	平成4年卒 第7期生
角南 和治	平成4年卒 第7期生
谷 守通	平成4年卒 第7期生
丸山 啓輔	平成5年卒 第8期生
高間 雄大	平成5年卒 第8期生
相田 哲史	平成5年卒 第8期生
河原 一仁	平成5年卒 第8期生
吉田 綾	平成6年卒 第9期生
吉田 篤史	平成7年卒 第10期生
中尾 博之	平成7年卒 第10期生

朝倉 昇司	平成8年卒 第11期生
菅田 吉昭	平成9年卒 第12期生
大島都美江	平成9年卒 第12期生
松下 公紀	平成10年卒 第13期生
森實 典子	平成10年卒 第13期生
宮島 美穂	平成10年卒 第13期生
足立 俊典	平成10年卒 第13期生
高橋 欣吾	平成10年卒 第13期生
高橋 淳子	平成10年卒 第13期生
伊藤 真帆	平成11年卒 第14期生
岡 牧郎	平成11年卒 第14期生
藤原 大輔	平成11年卒 第14期生
白髭 由恵	平成11年卒 第14期生
杉山 聖子	平成12年卒 第15期生
大原美奈子	平成12年卒 第15期生
高吉 理子	平成13年卒 第16期生
岡村 暢大	平成14年卒 第17期生
中野 貴之	平成14年卒 第17期生
佐々木佳子	平成14年卒 第17期生
大河 啓介	平成14年卒 第17期生
杉原 雄策	平成17年卒 第20期生
近藤 誠之	平成18年卒 第21期生
越智可奈子	平成18年卒 第21期生
小河原悠哉	平成18年卒 第21期生
飯田 あい	平成18年卒 第21期生
尾崎 正知	平成20年卒 第23期生
妹尾 真弓	平成21年卒 第24期生
岡田 博	平成25年卒 第28期生
小野 幸代	平成26年卒 第29期生
岡部 浩哉	平成26年卒 第29期生

「人見君、中尾君 教授就任同期で祝う会」を開催しました

医療法人和風会橋本病院 副院長
平尾 徹 (平成7年卒・10期生)

平成30年5月に10期生の友人である人見浩史先生が関西医科大学iPS・幹細胞再生医学講座 主任教授に就任されたので、それを同期の友人達でお祝いしようということになり、劉有子先生が計画・立案し、平成30年10月28日に大阪京橋の「大北京」でお祝いの会を行いました。当初は関西圏中心の友人を中心にと考えていましたが、最終的には西は佐世保、東は千葉から20人を超える同期生がお祝いのために集合しました。大学卒業以来久しぶりに再会した先生方が多く、あつまった皆、それぞれのフィールドで活躍し、活気に満ちあふれ、健康的な表情であったことが私には大変印象的でした。

人見先生は卒後、香川医科大学大学院に入学し、その後薬理学講座を経て、エモリー大学医学部循環器内科に留学され、帰国後は循環器腎臓脳卒中内科 助手、薬理学講座 准教授を経て、平成23年4月からは京都大学IPS細胞研究所 特任研究員になりました。そこでは腎臓再生の研究を一貫して取り組み、平成30年5月から関西医科大学iPS・幹細胞再生医学講座 主任教授に就任されています。人見先生は腎臓内科医として研修、外来診療に従事していたとき、現在の医学では、なかなか解決できない沢山の症例と遭遇し、その経験から、基礎研究に答えを求め、ひたすら研究を行い続け、再生医学を臨床に応用することを目指されたとのことでした。研究テーマは私には理解できない難解なもので、詳細には触れませんが、iPS・幹細胞を用いたエリスロポエチンに関して、世界をリードする内容の様です。人見先生の研究室ホームページには、京都大学の山中先生と並んで写った写真もあり、凡人の私にも、その業績の偉大さ、研究内容の重要性が伝わってきます。

さてこのような素晴らしい人見先生ですが、学生時代はどうだったのでしょうか？以後「人見先生」⇒「人見」として友人としての記述に移らせていただきます。

学生時代の人見の印象はいつもニコニコしている顔が思い浮かびます。温和な性格で、先輩や後輩からも慕われていました。そんな人見の下宿にはいつも人が集まっており、そこは不夜城の如く連日麻雀が行われ、そこでの人見は日常とうってかわり、いつもポーカフェイス、素直な打ち筋で麻雀をしていたことが昨日のこのように思い出されます。毎日時間があれば、私と二人でいろいろ戦略を練り、フリー雀荘に乗り込んで、ボコボコに大負けした日々が昨日のこのようになります。

ある時私が彼の下宿を訪ねると、「みてみて、これすごい！！」と見せてくれたのが、当時まだ性能が4MB以下程度のパソコンで、相当苦勞し、長時間プログラミングして作成した、飛行機が飛んでいくグラフィックアニメーションだったのですが、そのすごさ

は、当時の私には理解できませんでした。ひとつの物事を集中して成し遂げるといふ姿勢は、その当時から備わっていたものだ、と今振り返ればそう思います。

話を祝賀会に戻します。香川医大を卒業して23年、久しぶりに会った人見先生は、学生時代と変わらずニコニコした表情と、きらきら輝いた目で、今後の研究室の展望、そしてこれからの医療、治療について熱く語ってくれました。人見先生の温和な性格と徳、真摯に取り組む研究姿勢、そして何より再生医学によって病気に苦しむ人に役立てるのだ！という強い信念は、必ずや研究室と医療の発展に繋がると確信させられました。

人見先生、本当に教授就任おめでとうございます！



星川、清光、中尾、人見、斉藤



平尾、星川、福田、日並



美女と教授達！

中谷、高橋、加藤、人見、劉、中尾

中尾博之先生の教授就任を祝して

三豊総合病院 脳神経外科部長

齊藤 信幸 (平成7年卒・10期生)

2018年7月に中尾博之先生が岡山大学災害医療マネジメント学講座教授に就任されました。同年5月には人見浩史先生も関西医科大学iPS・幹細胞再生医学講座教授に就任され、香川医科大学1989年入学-10期生から、香川大学医療情報学教授横井英人先生、香川県立保健医療大学臨床検査学科教授中村丈洋先生に続いて、4名の教授が誕生しました。

友人代表として中尾博之先生(“中尾さん”と呼んでいました。)の「人となり」を、お伝えできればと思い、思い出すままに並べてみます。

「キャベツに麻酔をかけたらかうなるかわかる？」
「……………」

初めて聞かされたのがいつだったか定かではありませんが、中尾さんの凄さは、この一言に凝縮されていると思います。もちろん、僕は答えることができませんでした。「ニヤッ」と笑いながら嬉しそうに返答を待つ中尾さんに、「すごいことに興味をもつんだなあ。」と驚嘆したことが今でも忘れられません。麻酔は動物にかけるものと思っていましたから。

学生時代の早い時期から麻酔学教室で実験をされ、実験の醍醐味を熱く語っていました。中尾さんはバイトと部活(ウインドサーフィン部)で多忙にもかかわらず、時間を見つけては実験をされていました。疑問を疑問のまま放置せずに探求されていたんだと思います。

先ほどの一言も、一切の先入観を排して、物事を見つめようとする姿勢の現れではないかと思います。彼は常に独創的で、そして真理をあぶり出そうとする粘り強い探究心が当時からありました。

探究心!?!といえは、何かの話をしている時に、僕が少しでも口ごもると、「あっ、何か隠してるな〜。言いな。隠さんと。喋っておしまい。楽になんで〜。ほら、ほら、ほら〜。言いなよ〜。」とニヤニヤ笑いながら追及の手を緩めず、こちらが話すまで「ほら、ほら〜。」と続ける根気強さも備わっていましたね。

で、彼が同じシチュエーションになった時、

「中尾さんも喋りい〜な、隠しとるやろ。ずるいわあ〜。喋りい〜な。ずっこいわ〜。」

「ええやん。また今度話すわ。ええやろ。まあ、ええやん。さあ行こう!」となって、僕のほうはいつも煙に巻かれていました。教授になる人はやはり違いますね!

卒業して数年後、中尾さんが出張の途中に数時間時間を作ってくれて、再会することができました。「ニコニコ」笑いながら「ごめんごめん、待たせちゃって。」と腰をかがめて改札を出てくる姿は、学生時代と全く変わりませんでした。背負っていたデイバックはずしりと重く、荷物ではちきれそうでした。

中に入っているものを尋ねると、「急な呼び出しがあるから、3日間は動けるようにしてるんよ。パソコン、ラジオと非常食、それと着替え3日分。」と「ニヤッ」と笑って一巻きのトイレットペーパーも見せてくれました。このくだりは当人同士には



小林、山口、中尾、福田、日並

解るんですが割愛します。

この時、多くの犠牲者が出てしまった不幸な脱線事故発生直後で、現場で懸命に救命救助活動をされていたことを知りました。昔から自身のことは多くを語らない中尾さんですが、現場で大変な思いをされ、一人でも多くの人を助けようと大きな枠組みの構築を目指していたんですね。

災害医療マネジメントは火急の重要事項です。今後起こり得る巨大災害に立ち向かうために医療関係者だけではなく、国や地方自治体、あらゆる職種全ての方々を結集して、立ち向かわなければなりません。

中尾さんはそのような大きな枠組みを創るために頑張っておられました。教授になられた時、いかなる状況下においても、医療活動が継続できる方策を探りながら、急性期医療から中長期



中谷、加藤、福田、渡部



小野、星川、日並、宮崎

的な保健や予防まで包括できる人材育成について取り組みたいと話されていました。このような大きな仕事を進めていくには人の力、そして相互の枠を超えた協力が必要ですよ！

そのこともあって、同じく救急災害医療に尽力している方々の動向には、常に目を配られていました。同期生の山口大介先生が、2017年10月航空自衛隊航空機動衛生隊長（1等空佐）に着任された時も、「すごいわー、山口くん1佐やで、1佐!! 防衛医大出身でない者として、初の隊長やでー。1等空佐は教授と同じポジションやで。民生協力もやっている、空飛ぶICUの隊長やー。」と感嘆されていました。

この二人がタッグを組めば鬼に金棒！ 最高やなと思っていましたが、水臭い中尾さんは、自身が教授になることを、おくびにも出していませんでしたっけ。

これから益々講座のトップとして多忙を極めるとは思いますが、時間が合えばまたみんなで1杯やりましょう。中尾さんが目指す、一人でも多くの人を助ける仕組みの実現と、後進の育成が成功することを祈っています。再び一緒にアラスカに行くのはそれからですね。

※写真は旧姓で表示されています。



山口、大塚



人見、日並、平尾、中川

一言ずつお祝いの言葉と近況報告中



水谷、宮崎、細木



渡部、小林、李、山口、大塚



中尾、アラスカのアラスカ犬



小笠原、水谷、宮崎、吉本



第17回関東支部会 開催報告

年に一度の楽しい時間、感じる「絆」

佐々木豊明（昭和63年卒・3期生）

平成30年11月25日（日曜）、今年も横浜山下公園前のホテルニューグランドで第17回関東支部会が開催された。青森市在住の私は、本来関東支部会に所属していないのだが、3年前に同期の清元秀泰先生に誘われて参加し始めた。関東支部会長を務める同期の伊藤理先生が難病に侵され、彼を元気付けるために是非参加してくれとのことであった。実際参加してみると、懐かしい顔が沢山！初めて会うずっと後輩の先生とも気軽に話ができる不思議な空間。それ以来、30年前の学生時代にタイムトラベルしたような楽しい感覚が忘れられずに毎年参加するようになった。現在は、関東という枠を取り払って全国の同窓生が誰でも参加できるシステムになっている。日本全国の都合がつく先生には、奮って参加して会を更に盛り上げてもらいたい。

さて、今回の支部会は1期生から33期生までの参加があった。赤沼真夫先生の乾杯の発声、北窓隆子先生の御挨拶に始まり実に趣向を凝らしたものになった。香川医大（敢えて香川医大と言わせて頂く）には才能豊かな先生が多いようで、マリimba奏者の7期生村松明子先生は御自分のマリimbaを持ち込み、同じく7期生でジャズ歌手の田中民江先生とのセッションが行われた。更に今回の司会を務めて下さった内山順三先生のサクソ、諸井隆一先生のハーモニカ演奏も飛び入り参加で素晴らしい演奏を聴くことができた。

例年は、3期生の清元秀泰先生の吉本興業所属タレントのような絶妙な司会で会が進行してゆくのだが、今回は清元先生の政界進出活動で残念ながら欠席となったため白羽の矢が当たったのが内山順三先生であった。内山先生も御自身のクリニックの中に海外留学時代からの研究を進めるためのゼブラフィッシュを使った研究室を構える他、トライアスロンでも活躍しているスーパードクターである。清元先生にも引けを取らない、流れるような司会ぶりであった。

会場では、丸テーブルに座り美味しいフレンチのコース料理を食べながら皆で歓談している。アルコールが入り会が進むにしたがって各々が好きなように移動し、会場のあちらこちらで歓声が上がっている。

中盤からは一人一人の近況報告が始まった。皆、世界中で素晴らしい仕事をしていることが良く解り、新設医大として開設当初には卒後の進路に皆が不安を抱いていたことが嘘のようなものである。

盛会のうちに会も終盤になった頃、集合写真撮影が行われた。その後、なんと皆で校歌斉唱ということになった。「えっ！？校歌？」そう言えば校歌があったなあ。というような反応が一番多かったようだ。しかし楽譜が配られて伴奏が始まると、何となくメロディー



伊藤理支部会長を囲んで(筆者 2列目左)

を思い出すのが不思議であった。歌える歌える！これでまたグッと学生時代の感覚と、参加したみんなの心が一つになったような感覚を味わうことができた。

こうしてあっという間の2時間が経過して、楽しかった関東支部会も無事終了となった。二次会会場も用意され、大いに盛り上がったようである。私は、帰りの飛行機に間に合わないため毎度二次会に参加することは出来ないが、十分に楽しい時間を過ごすことができた。

会場は、羽田空港からリムジンバスで30分程、ホテルのすぐ傍にバス停があるため大変良いロケーションである。会は日曜の午後からなので私は毎回日帰りで参加している。これが土曜の夜だったら二次会に参加できるのになあと思ったりもする。

ともあれ、この投稿をみて下さった先生方、次回の関東支部会は11月24日の日曜日に開催予定なので、今から都合を付けて頂いて是非参加してみてください。きっと「会の虜」になるでしょう。



司会の内山順三先生

第17回 関東支部会に参加して

初企画「音楽のプレゼント」の裏話

村松（岡本）明子（平成4年卒・7期生）

平成30年11月25日日曜日、良く晴れた気持ちのいい午後に横浜ニューグランドホテルにて開催された関東支部会に初めて参加しました。1期生から33期生まで32名が集まり、盛大に執り行われました。

今回の支部会の裏話を少し…

前月10月の末に、先輩、内山順造先生から突然連絡がありました。「今度の関東支部会に先生と同級生のジャズピアニスト呼べないかな」参加する予定でもなかった私はこのときは全く他人事で、「わかりました。連絡してみます」とお答えし同級生に連絡しました。彼は多忙でその日は先約があり無理とのこと。その旨を連絡すると「ジャマリンバとボーカルでお願い」何？（マリンバとは私のこと、ボーカルとは同級生で親友の田中民江先生のことです）よく事情を伺うと、7年も会長を務めてくださった伊藤理先生の体調が優れず、伊藤先生に喜んでいただくため今回は音楽のプレゼントをしたいとのことでした。広島に在住の田中民江先生に連絡してみると快く「いいよ」という返事。お引き受けしました。

マリンバとジャズボーカルで何をやろう？ 11月3日4日の連休に田中先生とは別件で約束していたのでついでに打ち合わせをしました。ほぼ、ぶっつけ本番になります。良く知っていて合わせ易く季節感がありしかも聴いていて楽しくなる曲がいいね…ということで3曲決め、音をそれぞれ録音して持ち帰り本番に備えることとなりました。

さらにもうひとつの企画も思いつきました。「みんなで香川医科大学校歌を歌おう」です。香川医科大学は香川大学に統合されてから校歌も変わり、医学部学部歌というのができているようです。しかし参加者を見ると医科大学時代の方が大多数だったので「校歌」にしました。私は学生時代コールエスポワールという合唱部で活動していて式典のたびに校歌を伴奏したり歌ったりしていました。当時からの校歌はとてもいい曲だと思っていました。ところが楽譜があ



左から
内山先生、諸井先生
田中先生、村松先生

りません！同級生で合唱部だった放射線科の木村成秀先生に25年ぶりに連絡をとり楽譜をさがしてもらうことにしたところ、ちょうど同じタイミングで同窓会事務局の柚山さんが楽譜をみつけてくれました。次は歌う人です。9期生の妹に「知ってる？」と聞くと「なんか聞いたことはあるけど歌えない…」と言うので、これは先導が必要だと思いました。神奈川県在住で妹と同じ9期生しかも合唱部後輩の小西（金井）晶子先生にお願いしました。9期生の二人は伊藤理先生の奥様と同期になります。この再会もきっと喜んでいただけたと思います。

24日土曜日。田中先生と私は、それぞれ自院の診療後に横浜入り。前入りするなら打ち合わせがてら夕食をと内山先生からお誘いいただき、元祖のすき焼きをいただきながら打ち合わせ。その場で急遽内山先生にも参加していただくことが決まりました。その夜は横浜の素敵な夜景をながめながら内山先生が用意してくださったキーボードで校歌を練習して過ごしました。



伊藤正裕初代支部会長



教授就任の和田雅樹先生

さて当日。マリimbaはとても大きな楽器です。4メートル弱あります。もちろんそのまま運搬ではなく、分解できて10個以上のパーツとして運び組み立てます。(この組み立て、解体ショーはマリimbaの演奏会をするときみなさんにおもしろがっていただけます) 11時に楽器を搬入し組み立て、そこからリハーサル開始。1曲目はマリimbaソロで「小さな祈り」エヴェリン・グレニーという聴覚障害を持つ音楽家の曲です。すてきなハーモニーで聴覚障害者が書いたとは思えない曲なので癒しと励みになるかと。2曲目は「赤とんぼ」マリimba奏者の布谷史人氏が編曲したものにボーカルをいれてもらいました。独奏とは雰囲気が変わり歌が入ることですてきになりました。田中先生はキーが低すぎるのにもかかわらずいつもどおり素敵なボーカルをいれてくれました。3曲目はover the rainbow誰もが知っている名曲です。ここで内山先生のサクソと7期生諸井隆一先生のハーモニカが入りました。内山先生のサクソ、心をこめた丁寧な演奏から始まりました。諸井先生には当日、急に参加をお願いしましたが、見事なアレンジでした。田中先生のボーカルは言わずもがな。本領発揮で皆が聴きほれました。

演奏後、各自の近況報告が行われました。司会の内山先生から、なにかひとつ自慢できることを披露するという提案でしたのでそれぞれ近況に加えて楽しい報告を行いました。

そして最後に、香川医科大学校歌斉唱です。小西先

生がマイクを持って先導し、村松が伴奏し、参加者全員で歌いました。おだやかな香川の風景が脳裏に浮かび若かりし頃の情熱や希望を思い出させる歌詞に、第二の故郷香川を懐かしく思い出しました。母校と同窓生のますますの発展を願い、歌声にのせました。「校歌？知らないかも」と言いつつも、大きく響いた歌声をきくとやはり皆さん覚えていらしたようです。

このようにして、今回のはじめての音楽企画は執り行われたのでした。伊藤先生に喜んでいただきたいという内山先生の熱い思いは充分伝わったように感じました。私も田中先生も参加させていただいてよかったですと思っています。ありがとうございました。



伊藤 理、北窓 隆子、伊藤 正裕、井上 清、内田 光一、坂本 和裕、井上 由実、佐々木 豊明、高久 誠子、岡野 光博、小出 隆司、赤沼 真夫、内山 順造、野村 直人、入江 琢也、田中 民江、村松 明子、諸井 隆一、和田 雅樹、伊藤 美奈子、小西 晶子、武田 早苗、松尾 寛、清岡 崇彦、設楽 万里子、宮崎 達也、松田 陽子、山中 隆夫、幾世橋 佳、岩部 真人、白井 隆之、寺崎 宇毅 (卒年順。写真の位置とは異なります。)

学生支援（競争的資金）活動報告

讃樹會では、学生生活の活性・充実に資することを目的とし、2018年度から学生支援を行っています。採択は年間5件に限られます。このことにより、将来的な競争的資金獲得の練習の場となることも期待しています。（2019年度募集要項は讃樹會HPを参照下さい。）

第1回（2018年）の採択団体5組の活動について、報告していただきます。

IFMSAK-ESC：SCOREによる研究留学プログラム

IFMSAK-ESC

医学科4年 パラマ ジョン 賢一

2017年から始まったIFMSAKは多様な活動に関わっていますが、その中でIFMSAK-ESCは学生の留学を支えています。IFMSAK-ESCのESCはエクステンジ・サポート・クラブの略であり、主な活動はSCOREという国際留学プログラムです。SCOREは学生を中心に管理され、世界中の医学部が参加しています。研究留学のプログラムでもあるため、まだ臨床的な知識がない低学年の学生も参加できます。

SCOREを通して留学すると、他のSCORE参加大学に留学することが可能になります。すなわち、世界の

殆どどこでも行けるようになります。毎年参加する大学は少し変わりますが、北米からアフリカ、東南アジアから中東、参加している大学は殆どの国にあります。研究留学であるため、科学の共通言語である英語がコミュニケーションの中心になりますが、主語が他の言語である国に住むことで留学生の一般的なコミュニケーション力も試されます。その他、数週間も海外に住むことで自立性や問題解決能力、多様なスキルが試されます。他の留学プログラムの中でも、学生の国際交流の場面での実行力が試されるプログラムだと私は考えています。



香川大学の学生がSCOREに参加し始めたのはIFMSAKの開始の直前であり、今まで留学生を私を含め4人送り出しています。中国、ドイツ、フィンランド、マルタ、様々な国に行かれています。2019年は5人目の留学応募者がスロベニアに行く予定です。留学先の研究所では各留学生が研究の勉強と国際交流、両方に励んで無事に帰国できました。

IFMSAを通しての留学は他の留学より費用は少な



写真1 マルタ(香大生は右下)

いです。どの国に行っても宿泊費と一日一食分、学費が一定の金額になりますので、留学生はそれと飛行機代を負担します。しかし、それ以上各大学がプログラムに参加するには登録費もあり、それは毎年3万円になります。多くの留学生を募集できる大学ではこの費用を分担して留学生のコストを軽減するのは簡単ですが、始まったばかりのIFMSAKではそれが難しいため、讃樹會の支援をいただいて大変助かりました。香



写真2 フィンランド(香大生は右上)

川大学のSCOREの参加者は大変感謝していますので、来年の留学生もその支援に応じるようにこれからの留学の準備に励んでいます。

IFMSAK-ESCはもちろん別の活動もしています。SCOREは交換留学であるため、海外からの留学生を受け入れられるよう、国際交流委員会と研究室と協力して計画を立てています。また、香川大学からの留学生がSCOREに備えて英会話・医学英語の勉強会を毎週開いています。この勉強会はもちろん他の留学プログラムの希望者も受け入れています。留学に必要な書類準備等も手伝っています。2018年から低学年の学生のために英語で基礎医学チュートリアルも年に数回やり始めました。基本的な活動目的は「世界観が広い、多様な文化を配慮できる医学生の育成」としています。

IFMSAK : International Federation of Medical Students Associations - Kagawa
国際医学生連盟-香川
(IFMSAは国際レベルの組織名でIFMSAKは香川大学での一部になります)

SCORE : Standing Committee on Research Exchange
基礎研究交換留学に関する委員会

「香川大学学生ACLS勉強会」

香川大学ACLS勉強会代表

看護学科3年 春名佑衣子

香川大学学生ACLS勉強会は、「大切な人が突然目の前で倒れてしまったとき、あなたにはいったい何ができますか?」をテーマに、心停止になった人に遭遇したときに、救命処置を迅速かつ正確に行えるように、知識や技術を学んでいます。また、自分たちが学ぶだけでなく、地域の方や他の医学部学生に対して講習会を開くなど、誰にでもできる一次救命処置を伝えています。

●第24回ICLS講習会開催

2018年7月に学内にて、医学部学生を対象とした第24回ICLS勉強会を開催しました。今回は1年生3名を含めた8名の本学医学部学生とともに、香川県立保健医療大学保健医療学部看護学科の学生2名が受講してくださいました。学生ACLS勉強会のメンバーがインストラクターとなり、一次救命処置や、気管挿管やモニター付き除細動器、心停止のアルゴリズムなど二次救命処置についても受講生に体験してもらいました。中には来年就職を控えておられる受講生の方もおられ、臨床現場で講習会での経験が生きることを願っております。

●医学部医学科オープンキャンパス

2018年7月、オープンキャンパス2018（医学部医学科）にて、約80名の医学部志望の方を対象に体験会を開催しました。気管挿管の方法を簡単に説明した後、実際にモデル人形を使って気管挿管を全員に体験してもらいました。最初はなかなか成功しない方もたくさんおられましたが、何度か説明を加え繰り返すうちにほとんどの方が成功し、とても楽しんでいただけたと思います。



●BLS講習会開催

第39回香川大学医学部祭、徳島文理大学2018香川キャンパス大学祭「杏樹祭」、香川保健医療大学第19回大学祭「橄欖祭」（2018年10月）にて学生や一般のお客さんに対して、BLS講習会を開きました。また高松市のカスタムTシャツ専門店、株式会社ラブ・ラボ



様からご依頼を頂き、2日間で70名の職員の方々に胸骨圧迫とAEDの使い方を伝え、体験していただきました。これからも医学部生だけではなく、地域の方々とも講習会を通して交流し、地域の健康にも貢献していきたいと考えております。

他にも自分たちで勉強会を開いて知識を共有したり、学生ACLS勉強会の卒業生である研修医の先生に勉強会を開いていただき、幅広い知識や技術を身につけたりしています。また2018年1月には、認定ICLS講習会を濱谷英幸先生に開催していただき、認定ICLSコースを修了しました。他にもAHA BLS Provider、AHA ACLS Providerの資格を取得している学生もいます。

最後になりましたが、日頃の讃樹會のご支援並びにご指導頂いている救急救命センター長の黒田泰弘先生、循環器内科の濱谷英幸先生、香川大学院医学系研究科の永瀬克弥先生、さらにはスキルスラボでお世話になっております地域医療教育支援センターの皆様方に深く感謝申し上げます。



西日本学生学術フォーラム参加報告

学生研究サークル

医学科5年 佐伯 浩一 七條 直人

学生研究サークルの活動として、三重県津市で12月15日に開催された西日本学生学術フォーラムに参加し、研究発表を行いました。テーマは、「iPS由来EPO産生細胞を用いたHIF-PHD阻害薬の比較実験」で、発表に至るまでに様々な先生方にご指導をいただきました。もともと、「学生のうちに何か研究を行い、それを発表する」ということを目標にしており、3年生のころから第2内科の先生のもとで研究に励んでいました。そんな時に当時香川におられた人見先生からiPS由来EPO産生細胞の話聞き、興味を持ったことが今回発表に至ったきっかけです。その後、人見先生から「PHD阻害薬を用いた実験を行うのはどうか」とアドバイスを頂き、大まかな方針を立てることが出来ました。しかし、いざ実験を始めるとなると様々な問題点が浮かび上がり、発表直前まで試行錯誤の連続でした。特に今回の実験を行うにあたって、先行論文の調査が大変でした。実験に使う試薬の濃度や、プライマーの配列、塩基数が今回の実験で使うのに適しているかどうか、PHD阻害薬によって阻害されるPHDのアイソフォームや逆に増加するHIFのアイソフォームはどれか、一つ一つ調べていくには多大な時間と労



発表中の佐伯浩一

力を必要としました。また、実際に実験を行うにあたって、期待していた結果が出なかったり、そもそも実験データとして使えないようなものが多数出てきて、いったいどこが間違っていたのか分からずに困った思いをしたことも何度もあったりしました。それでもここまでやってこられたのは多くの先生方が支えてくれたおかげであり、この場を借りて感謝の気持ちを伝えさせていただきます。フォーラム当日はほかの大学の学生や先生も多く来られていて自分以外の研究している学生を見ることもでき、他の学生の発表を聞くことで自分の足りないところも感じる事が出来て、研究へのモチベーションを上げることが出来ました。他大学の教授の講演の中でも、最初からうまくいったという話はなく、その道で名を馳せるような人たちの成功の裏にはあまたの失敗があるのだと学びました。今回、実際にフォーラムで発表して、うまくいったところ、うまくいかなかったところといくつもありましたが、そのどれもが自分にとっては大きなプラスになっていると感じます。学生のうちにこのような経験を多く積むことが、将来医者になったときに必ず助けになってくれると信じています。最後に、この活動にご理解と支援をしてくださった讃樹会の皆様に感謝を申し上げて、終わりの言葉とさせていただきます。



七條直人

香川大学博物館特別展「タロファサモア」開催

医学科1年 氏原 英敏

今回、私は讃樹會学生支援（競争的資金）をいただいで、香川大学博物館において、「タロファサモア～南太平洋の島国の生活を知る～」と題した特別展を開催することができました。私は以前2014年～2016年の約2年間、南太平洋の島国であるサモアにおいて、青年海外協力隊として活動をおこなってきました。現地では中高等学校で理科や数学を教える教師として、サモアの先生方と協力して授業や教員研修に取り組んでまいりました。帰国後は2017年に愛知県の教職員を退職し、2018年に香川大学に入学いたしました。現在でもサモアと日本の交流をもとにサモアに対してできることはないかと考え、同じく元協力隊員で歯科医師である方と一緒にサモアを支援する活動をおこなっております。

今回香川大学博物館にて開催された特別展では讃樹會および香川大学博物館のご協力を得て、現地の民芸品や伝統品などの収集展示を行いました。特別展は2018年12月18日～2019年1月26日まで開催され、サモアの文化、生活様式、サモアの小学校の一日、日本とサモアとの違い、サモアで私たちがおこなっていた活動の紹介などを写真や動画、解説を交えて展示いたしました。サモアという国はポリネシア文化圏に属している国であり、ハワイやタヒチなどといった国と似た文化を持ちます。日本とは異なる文化でありつつもどこか懐かしさを感じることができる国です。そのようなことが実際に触れてわかるように、ご協力いただいで収集した収蔵品を手にとれる形で展示するように心



がけました。さらに展示物の中にはなかなか見ることのない現地のダンスや歌、学校での様子を収めた動画や写真を展示しており、こちらも大変好評でした。

また、12月22日には香川大学幸町キャンパス研究交流棟にてミュージアムレクチャーとして「サモアについて知る・サモアで行う国際協力」と題した講演会をおこなわせていただきました。中学生やその保護者、香川大学の学生や一般の方にご来場いただき、博物館展示だけでは分からない裏話から、実際に現在おこなっているサモアの小学校でのむし歯予防活動などを話させていただきました。特にサモアで現在おこなっているフッ素洗口を用いたむし歯予防活動や学校教育支援活動については講演後にも多くの質問をいただきました。

これからは、支援していただいた収蔵品や作成した資料を活用し、より多くの人々にサモアのことを知っていただく活動を続けて行きたいと考えています。また、日本とサモアの人的交流や文化交流を通じてより多くの人々が互いを理解できるような場を提供していきたいと考えております。



第73回国民体育大会 成年女子国体ウインドサーフィン級出場

香川大学医学部ウインドサーフィン部
医学科4年 大槻佳奈子



今回、私が香川女子代表として国民体育大会に出場するにあたり讃樹會よりご支援を頂きありがとうございます。頂いた支援金は大会出場のための道具輸送費・交通費の一部として使わせて頂きました。

現在、私の所属する香川大学医学部ウインドサーフィン部は、他の部の西医体にあたる九州山口医科学学生大会に毎年出場しており、昨年度の大会では団体準優勝、私個人はレディースで3位の結果を収め、来年の九州山口医科学学生大会に向けて部の強化を図っているところです。今回の国体出場により部の発展に更なる拍車をかけ、来年こそは団体優勝、そしてレディー

ス個人優勝を勝ち取りたいと思っております。

今年度の国体の目標は、昨年度愛媛国体の25人中17位という

結果とベストスコア11位を超えることでした。今年度の結果は26艇中19位とわずかに届かなかったもののベストスコアとしては10位と昨年を上回る結果を得ることができました。

日本海でのうねりと荒波に、台風接近による天候の乱れも重なり、瀬戸内の穏やかな海に慣れた私には厳しい環境の中でのレースでした。中でも、微風域での学生の体力を生かした漕ぎレースではなんとか健闘したものの、さすが国体、一筋縄ではいかず、オリンピック選手達のトップ艇団のレベルが高く、トップ艇からのフィニッシュ時間が規定オーバーとなる悔しい結果になったレースもいくつかありました。苦い経験の中から学ぶ点、反省すべき点を拾ってくることで次の大会に繋げて行こうと思います。

今大会では結果だけではなく、普段競い合うことのない社会人クラス・世界大会レベルの選手の実力をレースの中で感じ、また生涯を通してウインドサーフィンをしている選手の見据えるスパンの長さを実感しました。また、初めての日本海での経験は、地形や海面を見抜く能力を必要とするウインドサーフィンにおいて貴重な経験であったと思います。普段と違う海、道具、ライバルの中でのレースは私の中のウインドサーフィンの幅を広げてくれました。数年間の全てを賭けて登りつめるような大学生の大会に対して、結果や順位に縛られず、長いスパンでこの競技を愛し楽しんでいく社会人・プロセラーの生き様を実感しました。

今大会で得た経験は、出場が決まっている2ヶ月後のインカレ本戦や、部の目標である九州山口医科学学生大会、それだけではなく私の卒業後のウインドサーフィンとの関わり方にも大きく影響していくと思います。この経験を必ず次に繋げ、私個人とともに香川大学としても学生連盟のウインドサーフィンとしても更なる発展を遂げていきたいと思っています。ご支援をいただきありがとうございました。



第39回香川大学医学部祭を終えて

無限大 ～今年は何がでっきょん～

第39回香川大学医学部祭実行委員長

医学科3年 郷原 大智

第39回香川大学医学部祭が10月5日～7日の3日間にわたって行われました。今年は台風が近づいていて、3日間にわたり、医学部祭を行うことができない危険性がありましたが、どうにか台風がそれ、無事行うことができました。さらに大変多くの方にご来場いただき、大きな事故なく終えることができました。

本年度の医学部祭で私たちが掲げたテーマは「無限大～今年は何がでっきょん～」でした。「無限大」は各サークルが様々な創造性を発揮し、その創造性が無限大であることを示します。今回の医学部祭では、香川大学医学部生一人ひとりの個性が輝き、医学部祭の展示や企画、各サークルによる模擬店等が学生全員の力によって今まで以上に賑わい活気あふれるものになるようにという願いを“無限大”というテーマにこめました。また、学生だけでなく、医学部祭にお越しいただいた全ての方々にどんな催しがあるのだろうとわくわくしていただき、こぞってお越しいただけるような医学部祭を作り上げて行きたいという実行委員の意気込みを、香川県の方言に掛けて本年度の医学部祭のサブテーマに掲げました。



無限大

このテーマを実現するために、様々な取り組みをおこないました。まず、来場していただいた皆様にもステージ企画に参加していただきたいと考え、昨年度も行われました参加型ステージ企画「みんなでダンス」を今年も開催させていただきました。この企画では、三木町の保育園・幼稚園・小学校の園児・児童に、ステージに立ってもらい、簡単なダンスを会場にいる全員で踊りました。ダンス曲には今年一世を風靡したDA PAMPの「U.S.A.」を用いました。ステージ企画はどうしても学生向けのイベントになってしまいがちでしたが、参加型のステージ企画を設けることで、一般来場者の方にもより親近感を持って楽しんでいただけたと思います。ステージに上がってくれた子供たちの笑顔に会場はより一層盛り上がりしました。

今年の医療講演会では本学のOBであり、ドラマ「コード・ブルー」の医療監修を担当していた日本医科大学附属病院 救急救命センター 原義明先生をお招きし、「ドクターヘリで命を紡ぐドラマ「コード・ブルー」に込めた思いと救急の現場」をテーマに講演を行っていただきました。ドラマから興味を持った方

や、小さなお子さんを連れてきた方など多くの方々に、より医学への関心を深めていただけたと思います。また、医学展では昨年同様、香川県東讃保健福祉事業所とコラボレーションし、健康に関するミニゲームなどを行いました。そして昨年に引き続き、徳島文理大学と連携し展示に絡んだスタンプラリーも実施しました。昨年以上に多くの方々に医学展に足を運んでいただき、医学部の大学祭として地域の方々に医療や健康への理解を深めていただける機会を提供することができたと思います。

そのほかにも各部活動が力を合わせてこだわりの味を作り上げる模擬店、軽音楽部・アカペラサークル



参加型ステージ企画「みんなでダンス」



ステージ企画





医療講演 原義明先生(7期生)



医学展

「S-po」・ダンス部などによる迫力のあるライブや医学部管弦楽団による演奏会、特設ステージで行われる、数々の工夫を凝らした企画等、たくさんのイベントが実施されました。医学部祭を盛り上げてくださった各サークルの皆様、本当にありがとうございました。さて、今年度は医学科3年生・看護科3年生の有志総勢85名の実行委員で運営を行ってきました。前実行委員長からこの役職を引き継いだときは医学部祭を成功させるという漠然とした目標しかありませんでした。さらに、85名のトップに立って、率いるという経験はこれまでの人生で一度もありませんでした。初めての役職に苦戦しながら、約半年の準備期間でよりよい医学部祭を作ろうと、何度も話し合いを重ねて来ました。そして全員が笑顔になれるような医学部祭を作り上げることができたという自信が今はあります。医学部祭の運営に従事して、人とのつながりが増え、学年の仲間との関係を深めることができました。また様々な面で自信をつけることができ、言葉では言い表せないほどの貴重な経験をさせていただいたと思います。誘ってくださった前実行委員長の上谷さん、そして今回ともに医学部祭を運営してくれた実行委員のみなさんには本当に感謝しています。

最後になりましたが、一学部祭としてこれほどまでに大規模な香川大学医学部祭を開催することができましたのは、讃樹會、医師会、香川大学医学部の教職員の皆様、スポンサーの皆様、地域の皆様、そして当日お越しいただいた皆様の、御支援・御協力あつてのことと、改めて厚く御礼申し上げます。今後とも御指導・御鞭撻のほどよろしくお願いいたします。



実行委員集合写真

編 集 後 記

今年は天皇陛下の御退位により平成で迎える最後のお正月でした。この区切りの年の年頭所感を大森浩二先生にご寄稿いただきました。本号でも同窓生教授就任のご挨拶を、和田雅樹先生よりいただきました。新天皇即位そして新しい年号とともに、讃樹會としましても明るい話題の多い一年になることを期待したいと思います。

さて、支部会・懇親会が賑やかに開催されています。例年いただいております関東支部会に加え、岡山県としての懇親会のご報告をいただきました。更に今回は初めての開催となりました讃樹會香川本部懇親会の開催報告も、星川洋一副会長よりいただいております。初の試みでしたが佐藤清人会長、大西宏明理事長、濱本龍七郎名誉会長のご尽力により、横見瀬裕保病院長はじめ多くの大学病院科長、会員の先生方にもご参加いただき、大変盛況な懇親会となりました。多くの写真からも熱気が感じられるかと思えます。各支部会の盛況に負けぬよう、これからも香川本部のご報告も継続できればと考えております。

新たな試みとして、讃樹會による学生支援の一環としての競争的資金による活動報告を、5名の準会員よりいただきました。近年の学生はおとなしいという評判も耳にしますが、寄稿いただいた学生さんたちはとても頼もしく若い活力に満ちており、これからの讃樹會を活性化してくれることと、今後に大きな期待をしております。

毎号のことながら、ご多忙中にも関わらず寄稿してくださいました皆様、讃樹會会員、事務局の皆様にご心より感謝申し上げます。更に親しまれるような紙面になるよう、微力ながら努力してまいります。些細な事でも結構ですので、ご意見ご提案がございましたら宜しくお願い申し上げます。

広報局長 安田真之（平成9年卒・12期生）

事 務 局 か ら の お 知 ら せ

【連絡・問い合わせ先】

TEL 087-840-2291

Email: dousou@med.kagawa-u.ac.jp

- ◆医師賠償責任保険を年間通じて受け付けています（途中加入ができます）。詳細は事務局にお問合せ下さい。
- ◆同窓会、懇親会を開催する際には、10人以上集まると一人2000円の支援がありますので是非ご利用下さい。（助成カウント条件は、卒後15年まで且つ会費を納入いただいている正会員です。）
- ◆国外留学助成金の申込は年2回です。直近の締切は本年3月末日です。次は9月末日となります。
- ◆2019年度研究助成金/研究奨励金の申込締切は5月7日です。今回から、申請様式の記入方法に変更があります。詳しくは讃樹會HP上の申請書記入要領の説明をお読みいただきますようお願いいたします。

訃 報

名誉会員

竹内 博明先生 2019年1月

正会員

加治 源也先生（平成24年卒・第27期生）
2017年7月

謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

診療科だより

香川大学医学部附属病院 歯・顎・口腔外科

口腔から全身の健康に貢献する

科長 三宅 実

歯・顎・口腔外科は、歯科口腔外科診療において高度な歯科医療を県民の皆様提供する義務があります。口腔は、摂食・嚥下、構音などの重要な機能を司り、顔貌を形成し感情表現をし、人として尊厳を保つために重要な部位です。当科には、口腔外科の専門医・指導医だけでなく、がん治療認定医（歯科口腔外科）、インプラント専門医・指導医・認定歯科衛生士、歯科麻酔専門医、障害者歯科認定医、小児口腔外科指導医、外傷歯学会認定医、歯科薬物療法学認定医、口腔科学会認定医・指導医、PET核医学会歯科認定医、口腔ケア学会2級・3級認定歯科医・歯科衛生士、摂食嚥下リハビリテーション学会認定士が常勤で在籍し、専門性の高い医療を提供しています。具体的には、①他の医療機関では治療困難な口腔領域腫瘍症例の積極的受け入れとその治療、②矯正歯科医との連携強化による外科的顎矯正手術 ③地域歯科医師を対象とした日本口腔インプラント学会認定研修会の開催と保険適用インプラント治療、④唾石摘出、歯根端切除術を始めとする各種内視鏡支援下手術の実施などです。香川県で唯一の大学病院に属する高次医療機関として、一般の歯科医院では対応困難な顎口腔領域に生じる様々な疾患の診断と治療を行っています。また全身疾患で歯科開業医では治療が難しい方に対しましても、地域医療機関や院内各科と連携しながら、う蝕治療や歯周治療、抜歯等に対して安心・安全な治療を提供しています。

治療法の特徴

1. 智歯（親知らず）、埋伏歯抜歯、歯根端切除などの歯科外科

外来での静脈内鎮静法や入院して全身麻酔下に処置することも可能です。また従来は抜歯適応とされていた大臼歯根尖病巣に対しても、最近内視鏡支援下歯根端切除術を行っています。

(1) 全身的な疾患を持つ方

虚血性心疾患、不整脈、コントロール不良の糖尿病、腎透析中といった全身疾患を持つ方に対する抜歯などの外科処置を、血圧、呼吸、心電図などをモニターしながら、外来、あるいは入院下で行っています。

(2) 障がい児（者）や歯科恐怖症の方

局所麻酔下での治療が困難な障がい児（者）や歯科恐怖症の方に対しては、静脈内麻酔あるいは全身麻酔をかけて治療しています。中央手術室には、歯科用ポータブルユニット（エアタービンおよびコントラ用エンジン、3ウェイシリンジ、吸引装置付）のほか、歯科用デンタルX線撮影装置もあり、すべての歯科治療ができます。

2. 口腔ケア

近年、手術前口腔ケアが癌手術後患者の術後肺炎発症率を有意に低下させ、手術後

30日以内の死亡率は0.42%から0.30%に低下させることが明らかになってきました。当科でもがん手術の際の口腔ケアや全身麻酔で手術する際の歯の外傷予防の処置、化学療法治療や放射線治療中の口腔ケア、造血幹細胞移植や臓器移植の際の口腔ケア、糖尿病の教育入院に対する口腔ケア指導などを院内で各診療チームと連携し、幅広く展開しています。

3. 歯・顎骨・顔面外傷

常時対応できる体制を組んでいます。また、早期機能回復、社会復帰を目指した低侵襲治療が可能な、国内でも数少ない施設です。

4. 歯科インプラント

保険診療でインプラント治療を行う広範囲顎骨支持型装置手術に対応しています。口腔がん術後再建部、顎裂部へのインプラント、さらには自家骨、生体材料を用いた骨造成（骨移植）など、一般歯科医院では困難な症例を数多く手がけています。

5. 顎変形症

数多くの歯科矯正医の先生方と密接に連携し、歯科矯正治療単独では治療が困難な上顎あるいは下顎前突、顔面左右非対称などを伴う咬み合わせの異常に対して、3次元手術シミュレーションを行いながら安全で確実な外科矯正手術を行っています。

6. 内視鏡支援下唾石摘出術

切開を加えずに内視鏡で見ながら取り出します。本術式も施行可能な施設は、全国的にもきわめて限られています。

主な臨床研究では、三学会合同抗菌薬感受性サーベイランス 一歯科口腔外科領域感染症一、がん治療における口腔合併症の観察研究、周術期口腔機能管理の効果及び効果予測因子に関する後ろ向き観察研究、インプラント治療における歯科保健関連QOL（OHIP）の評価、骨吸収抑制剤関連顎骨壊死（ARONJ）に対するテリパラチドの有効性に関する多施設共同後ろ向き観察研究など多岐にわたっており、今後の治療へ還元すべく日々取り組んでいます。

